博　多　144

―博多遺跡群第191次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1197集

２０１３

福岡市教育委員会

博　多　144

―博多遺跡群第191次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一九七集

二〇一三

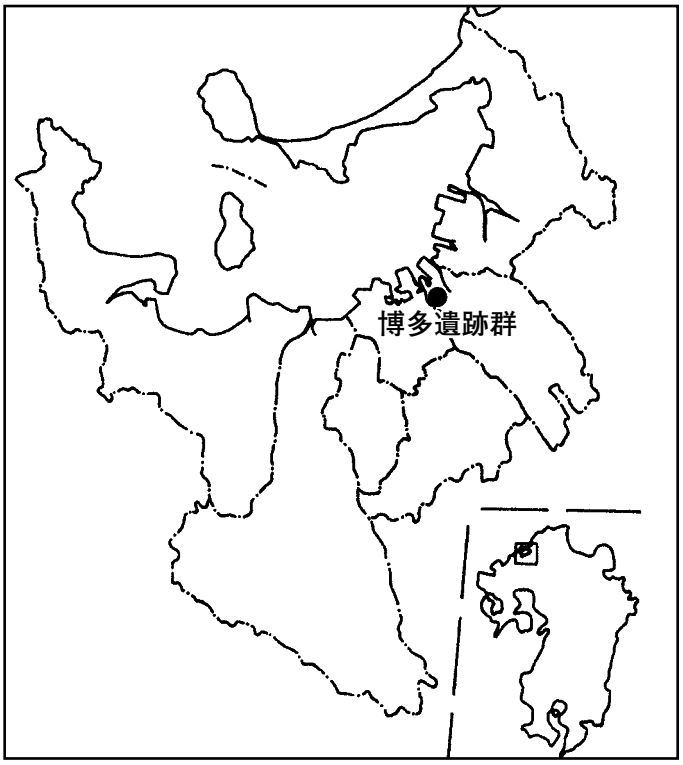
福岡市教育委員会

HAKA　　TA

博　多　144

―博多遺跡群第 191 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1197 集



遺跡略号　HKT－191
調査番号　1022

２０１３

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくことも事実であります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、民間共同住宅建設に伴い調査を実施した博多遺跡群第191次調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に平安時代から戦国時代にかけての中世都市の一部を確認すると共に、多数の生活用具や貿易陶磁器等の交易品が出土しました。これらは、当時の博多地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料としても活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、株式会社ダイヨシトラスト様をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成25年３月22日

福 岡 市 教 育 委 員 会
教育長　酒　井　龍　彦

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市博多区冷泉町423･425番において発掘調査を実施した博多遺跡群第191次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理･報告書作成は、受託事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構実測図の作成は、榎本義嗣･角信喜が行った。
5．本書に掲載した遺物実測図の作成は、榎本･平川敬治･井上加代子･撫養久美子が行った。
6．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、榎本が行った。
7．本書に掲載した挿図の製図は、榎本･井上･熊埜御堂和香子が行った。
8．本書で用いた方位は磁北で、真北より6°40′西偏する。
9．本書に掲載した国土座標値は、日本測地系(第Ⅱ座標系)によるものである。
10．遺構の呼称は、井戸をSE、土坑をSK、溝をSD、ピットをSPと略号化した。
11．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
12．本書で記述する遺物の分類、説明等については、以下の文献を参考とした。
山本信夫「統計上の土器－歴史時代土師器の編年研究によせて－」
『乙益重隆先生古稀記念 九州上代文化論集』1990年
横田賢次郎･森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」
『九州歴史資料館研究論集 4』1978年
太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』(太宰府市の文化財第49集) 2000年
13．本書に関わる記録･遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
14．本書の執筆および編集は、榎本が行った。

遺跡名	博多遺跡群	**調査次数**	第191次	**遺跡略号**	HKT－191
調査番号	1022	**分布地図図幅名**	天神49	**遺跡登録番号**	020121
申請地面積	486.3㎡	**調査対象面積**	171.8㎡	**調査面積**	162.3㎡（3面）
調査地	福岡市博多区冷泉町423･425番			**事前審査番号**	21－2－286
調査期間	平成22(2010)年9月2日～11月22日				

本 文 目 次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　１．概要 …… 5
　　１)調査の経過 …… 5
　　２)調査の概要と層序 …… 5
　２．遺構と遺物 …… 8
　　１)第１面 …… 8
　　（１)土坑(SK) …… 8
　　（２)溝(SD) …… 12
　　２)第２面 …… 14
　　（１)土坑(SK) …… 16
　　（２)溝(SD) …… 22
　　（３)ピット(SP) …… 22
　　３)第３面 …… 22
　　（１)井戸(SE) …… 22
　　（２)土坑(SK) …… 30
　　４)包含層等出土の遺物 …… 36
　３．結語 …… 40

挿 図 目 次

第１図　博多遺跡群位置図（１/25,000） …… 3
第２図　調査区位置図（１）（１/1,000） …… 4
第３図　調査区位置図（２）（１/300） …… 4
第４図　調査区北西壁面土層実測図（１/50） …… 6
第５図　第１面調査区全体図（１/100） …… 7
第６図　SK001実測図（１/40） …… 8
第７図　SK001出土遺物実測図（１）（１/３、１/４） …… 9
第８図　SK001出土遺物実測図（２）（１/１、１/３、１/４） …… 10
第９図　SK002実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３、１/４） …… 11
第10図　SK004実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３） …… 12
第11図　SD003･006実測図（１/40） …… 12
第12図　SD003出土遺物実測図（１）（１/３、１/４） …… 13
第13図　SD003出土遺物実測図（２）（１/２、１/３、１/４） …… 14
第14図　第２面調査区全体図（１/100） …… 15
第15図　SK011･012･014･015･016･017実測図（１/40） …… 16

第16図　SK011･012･014･015･016･017出土遺物実測図（１／３、１／４）…… 18
第17図　SK018実測図（１/40）および出土遺物実測図（１／３）…… 19
第18図　SK127･137･138･147･212実測図（１/40）…… 20
第19図　SK127･137･138･147･212出土遺物実測図（１／２、１／３）…… 21
第20図　SD150およびSP126･141･142･211出土遺物実測図（１／３）…… 22
第21図　第３面調査区全体図（１/100）…… 23
第22図　SE032実測図（１/40）…… 24
第23図　SE032出土遺物実測図（１）（１／３、１／４、１／６）…… 25
第24図　SE032出土遺物実測図（２）（１／３）…… 26
第25図　SE032出土遺物実測図（３）（１／３、１／４）…… 27
第26図　SE033実測図（１/40）および出土遺物実測図（１／３）…… 28
第27図　SE035実測図（１/40）および出土遺物実測図（１／３）…… 29
第28図　SK031･034･036実測図（１/40）…… 30
第29図　SK031･034･036出土遺物実測図（１／３、１／４、１／５）…… 31
第30図　SK051･052･161･162･183実測図（１/40）…… 32
第31図　SK051･052･161･162･182･183･198出土遺物実測図（１／３）…… 33
第32図　第１面包含層出土遺物実測図（１）（１／３、１／４）…… 35
第33図　第１面包含層出土遺物実測図（２）（１／１、１／２、１／３）…… 36
第34図　第２面包含層出土遺物実測図（１）（１／３）…… 37
第35図　第２面包含層出土遺物実測図（２）（１／３）…… 38
第36図　第３面遺構検出時出土遺物実測図（１／１、１／３、１／４）…… 39

図 版 目 次

図　版１　（１）第１面北西側全景（南西から）　（２）第２面北西側全景（南西から）
（３）第２面南東側全景（南西から）
図　版２　（１）第３面北西側全景（南西から）　（２）第３面南東側全景（南西から）
図　版３　（１）SK001（南東から）　（２）SK002（南西から）
（３）SK002土層（南西から）　（４）SK004（北東から）
（５）SD003（南西から）　（６）SD003土層（北東から）
図　版４　（１）SD006（北東から）　（２）SD006土層（東から）
（３）SK011（南東から）　（４）SK012（南東から）
（５）SK014（西から）　（６）SK015（南東から）
図　版５　（１）SK016（北東から）　（２）SK017（北東から）
（３）SK018（北東から）　（４）SK127（南東から）
（５）SE032（南西から）　（６）SE033（北東から）
図　版６　（１）SE035（東から）　（２）SK031（北東から）
（３）SK034（北から）　（４）SK036（南西から）
（５）SK051（北から）　（６）SK052（西から）
図　版７　出土遺物（１）
図　版８　出土遺物（２）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成21(2009)年７月24日付けで、福岡市博多区冷泉町423･425番(敷地面積：486.3㎡)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が、株式会社ダイヨシトラストより福岡市教育委員会宛てになされた(事前審査番号：21－２－286)。

これを受けて教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課事前審査係では、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから書類審査を行ったところ、過去に別事業者からの申請による確認調査の履歴があり、地表下約1.4m以下において中世を主体とする埋蔵文化財が確認されていることが判明した。この審査結果をもとに申請者と協議を行った結果、敷地面積のうち建物建築部分171.8㎡については、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、同箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することとなった。また、本調査に先立ち、申請者が土留め工事や表土掘り取りを行うことやコンクリート杭基礎の打設工事を認めること等の協議も進めた。

その後、翌平成22(2010)年８月20日に株式会社ダイヨシトラスト代表取締役を委託者、福岡市長を受託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年９月２日より発掘調査を、平成24年度に整理･報告書作成を同部埋蔵文化財第２課(組織改編により平成24年４月１日付で教育委員会から経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課に移管)が行うこととなった。

２．調査の組織

調査委託：株式会社ダイヨシトラスト
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：埋蔵文化財第２課長　田中壽夫
　　同課調査第１係長　米倉秀紀
調査庶務：埋蔵文化財第１課管理係　古賀とも子
事前審査：埋蔵文化財第１課長　濱石哲也
　　同課事前審査係長　宮井善朗
　　同課事前審査係主任文化財主事　加藤良彦
　　同課事前審査係文化財主事　木下博文
調査担当：埋蔵文化財第２課主任文化財主事　榎本義嗣
調査作業：阿部純子　崎村雄介　関哲也　田端名穂子　永松弘恵　中村幸子　西宮行輝　花田則子
　　原勝輝　光安昌子　鷲崎哲夫　角信喜(東海大学学生)
整理作業：木本恵利子　窪田慧　松尾真澄

発掘調査から報告書作成に至るまで、株式会社ダイヨシトラスト様、上村建設株式会社様をはじめとする関係者各位には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

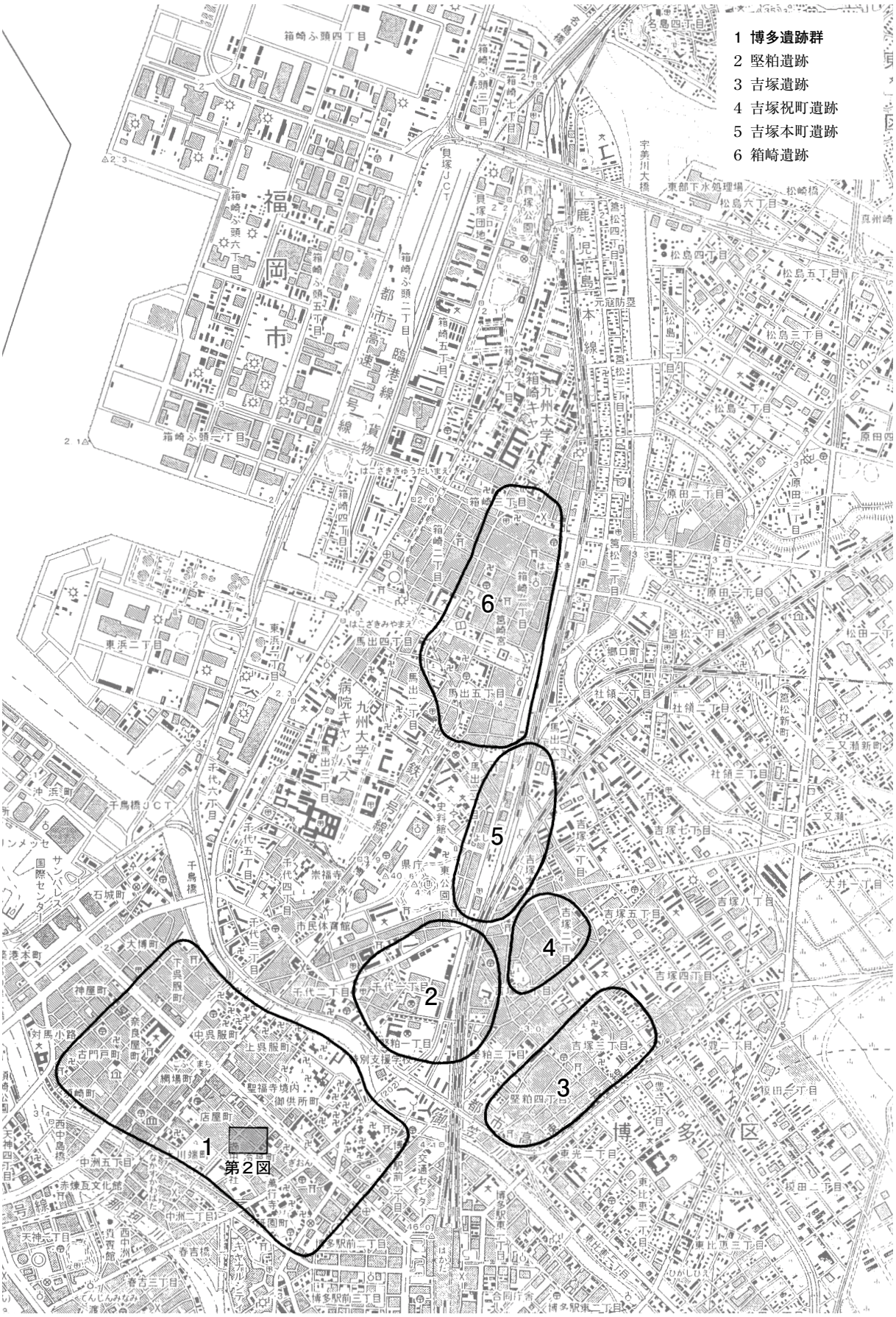
博多遺跡群は博多湾岸に形成された箱崎砂層とよばれる古砂丘上に立地しており、砂丘形成時期については少なくとも縄文時代晩期を下らないとする自然科学的知見が得られている。この砂丘は東区箱崎から博多区堅粕、中央区天神･荒戸を経て、早良区百道に至る。これらの砂丘微高地には第１図に示した範囲内で、南側から博多遺跡群、吉塚遺跡群、堅粕遺跡群、吉塚祝町遺跡、吉塚本町遺跡、箱崎遺跡が知られている。本遺跡群の立地する砂丘は、博多湾のほぼ中央に面し、東側を戦国時代に開鑿された御笠川(石堂川)、西側を那珂川によって画されるが、それ以前は、砂丘南側に御笠川の旧流路である比恵川が西流して、那珂川に合流していた。この砂丘は博多湾に面して、大きく３列から形成されており、内陸側から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと呼称される。このうち、砂丘Ⅰと砂丘Ⅱは「博多浜」と仮称され、両者は南西側から北東に延びるラグーンを起源とする狭長な谷部によって区分されている。また、「息浜」と呼ばれる砂丘Ⅲは砂丘Ⅱの前面に遅れて形成された砂丘で、11世紀頃までは、砂丘Ⅱとの間を流れる河川によって隔てられ、独立した砂州をなしていたが、12世紀初頭の埋め立てによって、陸橋状に砂丘Ⅱと結ばれた。

砂丘Ⅰ･Ⅱの博多浜は集落が形成された弥生時代以来、その性格を変容させながら、古墳時代から古代へと連綿と遺構の分布がみられる。その後、11世紀後半には、鴻臚館に替わって日宋貿易の一大拠点として繁栄を迎え、中世都市博多が誕生する。なお、それらを担った初期の宋商人の居住区や貿易港が砂丘Ⅱの西部に存在したことが指摘されている。また、博多綱首の助成による聖福寺や承天寺等の禅刹の建立や、その後の鎮西探題の設置を契機とし、町割りが進められ、都市としての景観が整備される。一方、息浜は、砂丘間の埋め立て後、13世紀以降に都市化が急速に進行する。なお、文永の役(1274年)後に息浜の博多湾側には元寇防塁が築造されるため、その北側に町場が拡大するのは、15世紀後半以降となる。また、室町時代以降、日明貿易や日朝貿易の繁栄によって都市機能の中心は、博多浜から息浜へと移っていったことが､検出遺構や出土遺物の量から窺える。戦国時代においては、貿易都市博多の領地をめぐる諸大名の争いは激化し、度重なる戦火が博多を襲っていることは、該期の焼土層によっても証明される。その後、天正年間に九州平定を遂げた豊臣秀吉による都市復興および新たな町割りが行われ、近世都市博多が幕を開ける。

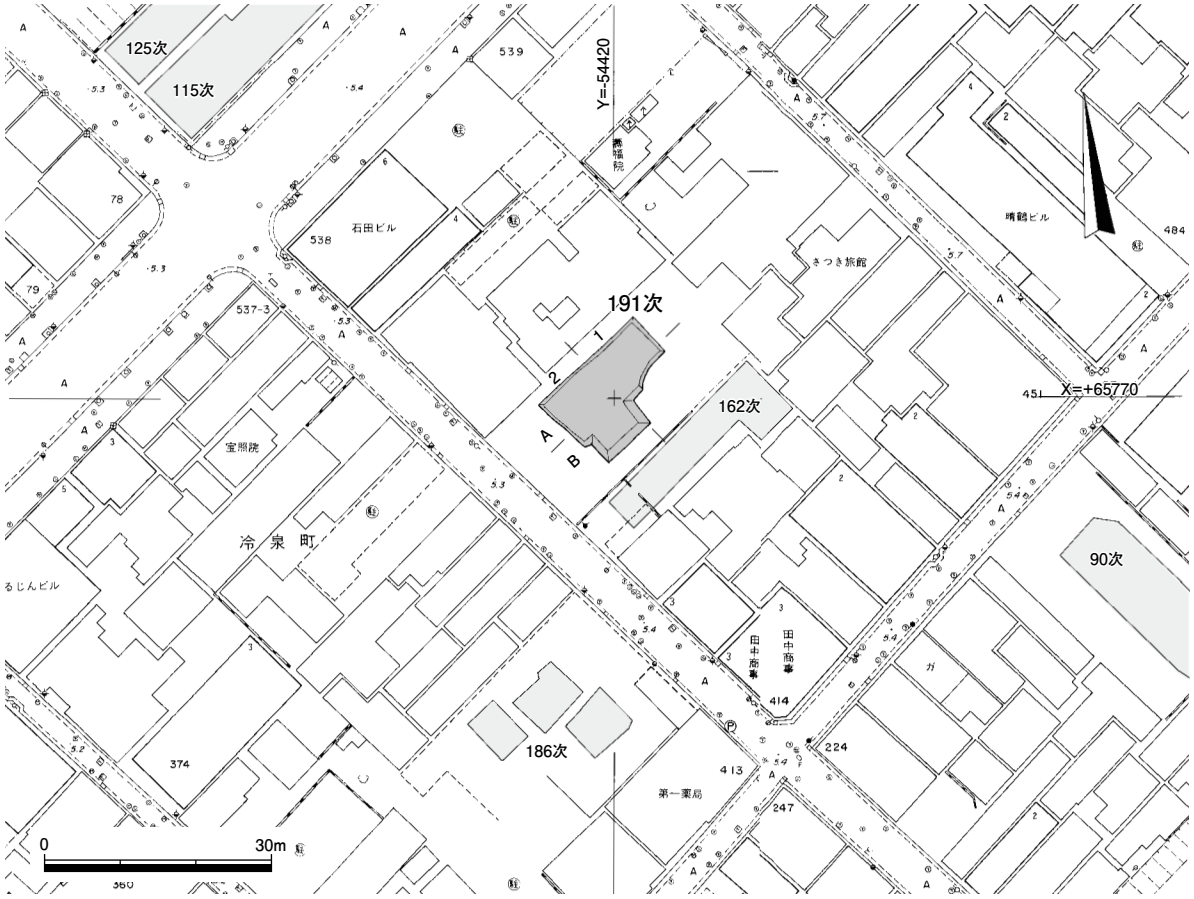
今回報告する第191次調査区は、砂丘Ⅱの尾根線に近い陸側の緩斜面に位置する。周辺の調査例は多いとは言えないが、南東側隣接地で第162次、南約40ｍで第186次、南東約70ｍで第90次、北西約70ｍで第115･125次の各調査が行われている(第２図)。本調査区周辺での初現期の遺構は、第162次の弥生時代終末期前後の甕棺墓や第186次の同時期の土坑であるが、混在する遺物から弥生時代中期末に遡る遺構が散在していた可能性が高く、この一帯は該期の集落の遺構分布の主体となる砂丘Ⅰの周辺部にあたる。続く遺構は古代に認められ、第162･186次検出の北東－南西方向の区画溝や第90次調査出土の大宰府関係施設と同笵の軒瓦が注目される。また、帯飾りや越州窯系青磁も散見され、この一帯は祇園町交差点周辺の官衙域に推定される区画の外部であるものの、該期の遺構の拡がりやあり方については今後の検討を要する。中世では博多浜一帯と同様に11世紀後半以降に遺構が増加するが、本調査区周辺では12世紀後半をピークとし、13世紀後半以降の遺構は減少する傾向にある。これは本調査区南東約200ｍに中心施設の所在が推定されている鎮西探題の設置と関係することが想定される。

＜参考文献＞

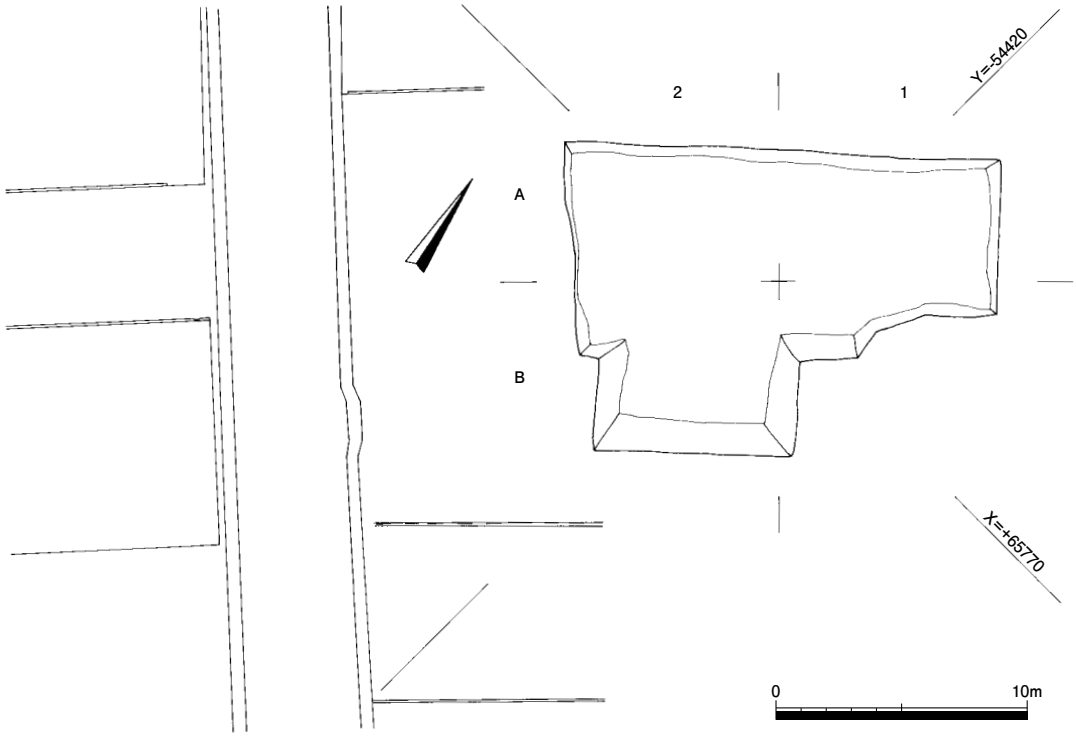
小林茂他編『福岡平野の古環境と遺跡立地』（九州大学出版会）1998年
大庭康時他編『中世都市･博多を掘る』（海鳥社）2008年
大庭康時『中世日本最大の貿易都市 博多遺跡群』（新泉社）2009年



第１図　博多遺跡群位置図（１/25,000）



第２図　調査区位置図（１）（１/1,000）



第３図　調査区位置図（２）（１/300）

Ⅲ．調査の記録

１．概要

１）調査の経過

今回報告する博多遺跡群第191次調査区は、博多区冷泉町423･425番に所在する。調査前の状況は、アスファルト舗装された駐車場で、その標高は約5.8mであった。

発掘調査は、H鋼および鋼板･横矢板による土留め工事やコンクリート基礎杭打設工事および重機による表土鋤き取りを終えた平成22(2010)年９月２日から開始した。なお、調査時の排土の場外搬出については、委託者が適時行うものの、一時的な排土置き場については、調査区内で確保する必要があったことから、まず調査対象地の北西側約３／４の調査を先行し、その後残る南東側の調査を実施することとした。

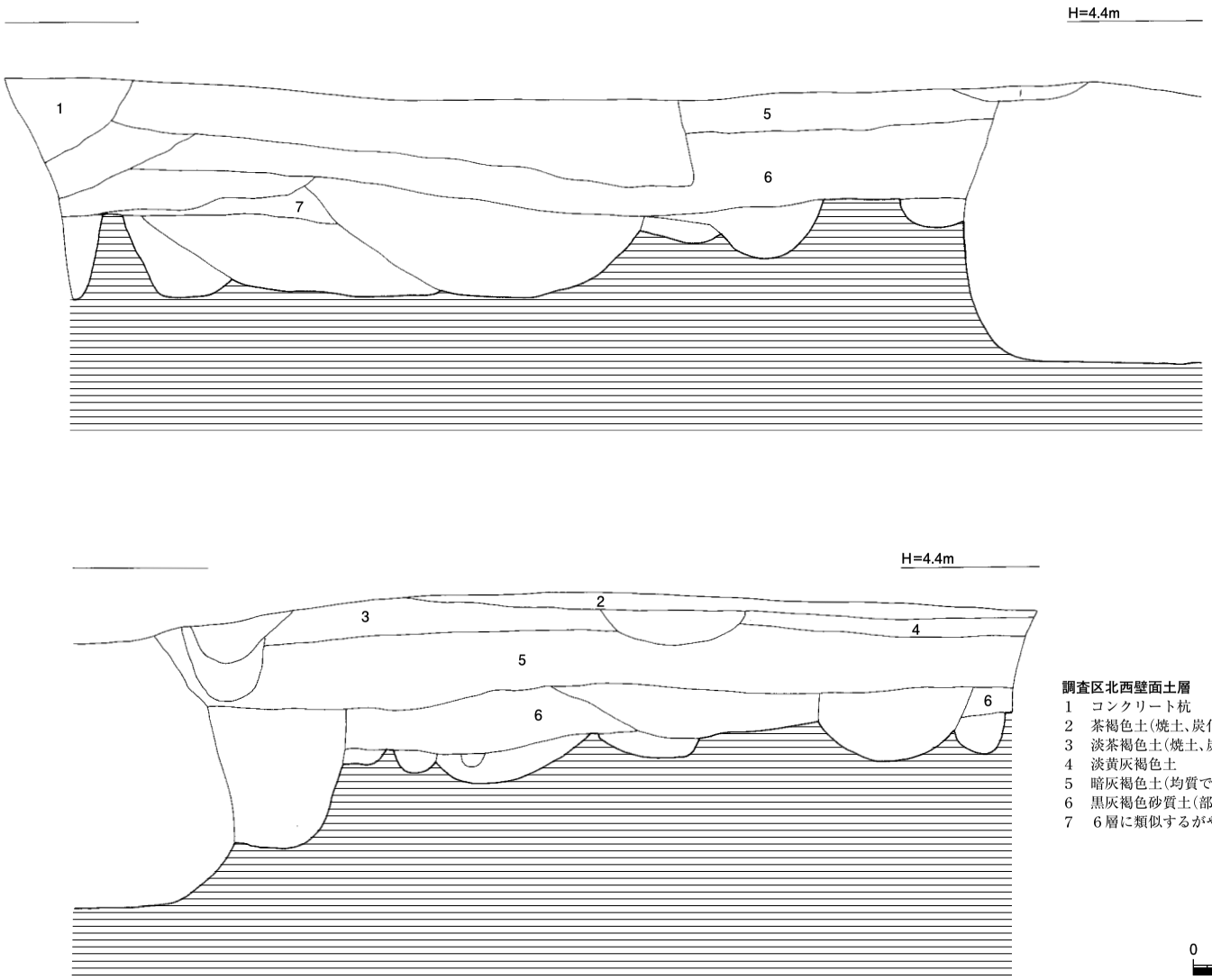
まず、器材搬入やベルトコンベアの設置を行い、その後人力で包含層を下げながら第１面目を設定し調査を開始した。その後、第３面までの遺構精査や掘削、写真撮影、包含層の掘り下げ等を人力によって行い、11月８日に北西側の調査が終了した。翌日から重機による排土の移動や南東側の鋤き取りを行い、遺構精査を開始した。なお、後述するが、南東側調査区は北西側での第２面を調査開始面とし、その後、同様に第３面までの調査を人力によって行った。全作業が終了した同月22日に器材を撤収し、第191次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「Ⅰ.－１.調査に至る経緯」のとおり、申請地面積486.3㎡のうち171.8㎡であったが、実際の調査面積は162.3㎡で、北西側で３面、南東側で２面の調査を行った。

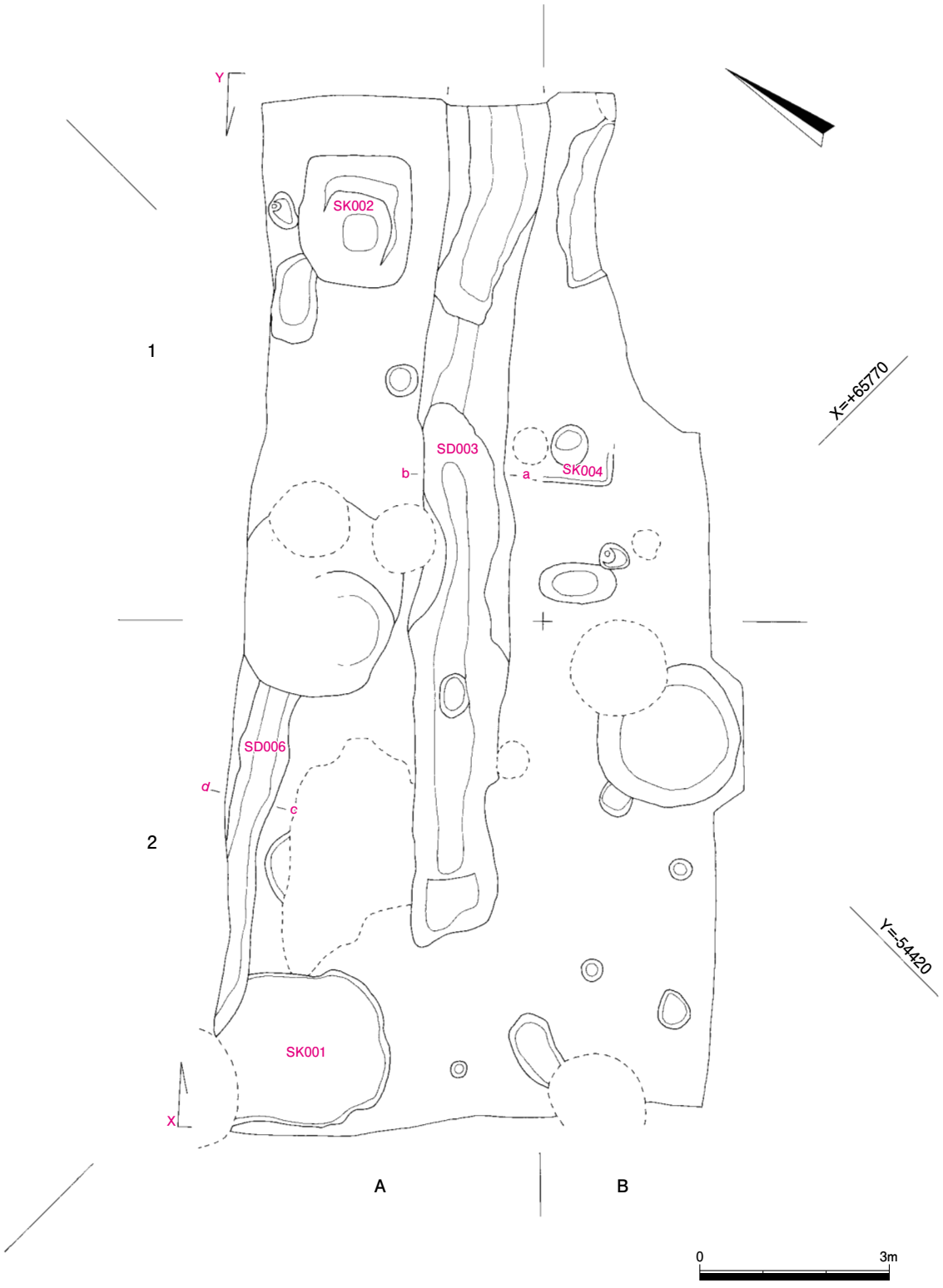
２）調査の概要と層序

本調査区は、後述する基盤砂丘面の傾斜から博多浜の海側砂丘列の尾根線に近い陸側緩斜面に立地するものと推定される。基本的な層序と調査時に設定した各調査面を第４図に示した調査区北西壁面の土層に基づき説明する。土層図の上面は重機による当初の鋤き取り面で、以下に２～７層の水平堆積層が認められる。北東側に残る各厚さ0.1m前後の２～４層は、炭化物や焼土を含む近世の整地層であったため、人力で５層途中の標高3.8m前後まで掘り下げを行い、**第１面**(第５図)を設定した。同面では16世紀代を主体とする溝や土坑を確認した。また、５層は均質でやや砂質の暗灰褐色土を主体とする中世後半の包含層で、整地行為による細かい堆積の単位は認められない。なお、後半に調査を行った南東側では撹乱が極めて多く、同面での調査は実施していない。続く**第２面**(第14図)の調査は、黒灰褐色砂質土を主体とする中世前半の包含層である６層途中の標高約3.4～3.5m前後で行い、12～13世紀の土坑や溝を検出した。この６層にも５層同様に細かい土層単位はなく、整地に起因する層ではない。また、調査区の中ほどの６層下には、よく類似した７層が認められた。最終面である**第３面**(第21図)の調査は基盤層である黄褐色砂層面で行ったが、上面付近は暗褐色砂質土が混じるやや汚れた砂層であったため、実際の遺構検出作業は僅かに下げた標高約2.9～3.1mで実施した。同面では第２面の検出遺漏による中世前半の井戸や土坑が多いが、古代の遺構が散見する。なお、砂層面は北東側(標高3.3m)から南西側(標高3.0m)に緩く傾斜している。

調査時の遺構番号は、001から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、包含層の遺物については、上位の遺構面番号を用い、上層から、第１面･第２面包含層出土遺物とした。なお、最終面の遺構検出時の出土遺物については、第３面遺構検出時出土遺物として取り上げた。



第4図　調査区北西壁面土層実測図(1/50)



第５図　第１面調査区全体図（１/100）

２．遺構と遺物

以下、第１面から順に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における平面座標を基準とした英字(北西側をＡ、南東側をＢ)と数字(北東側を１、南西側を２)を組み合わせたグリッド表記を用いる。また、各面の検出遺構、出土遺物の報告の後、各包含層等の出土遺物を報告する。

１)第１面

先述のとおり、５層途中の標高約3.8m前後に設定した面で、北西側のみ調査を行った。16世紀代を主体とする遺構が確認できた。なお、今回の報告から割愛するが、近世や近代の井戸も数基検出している。

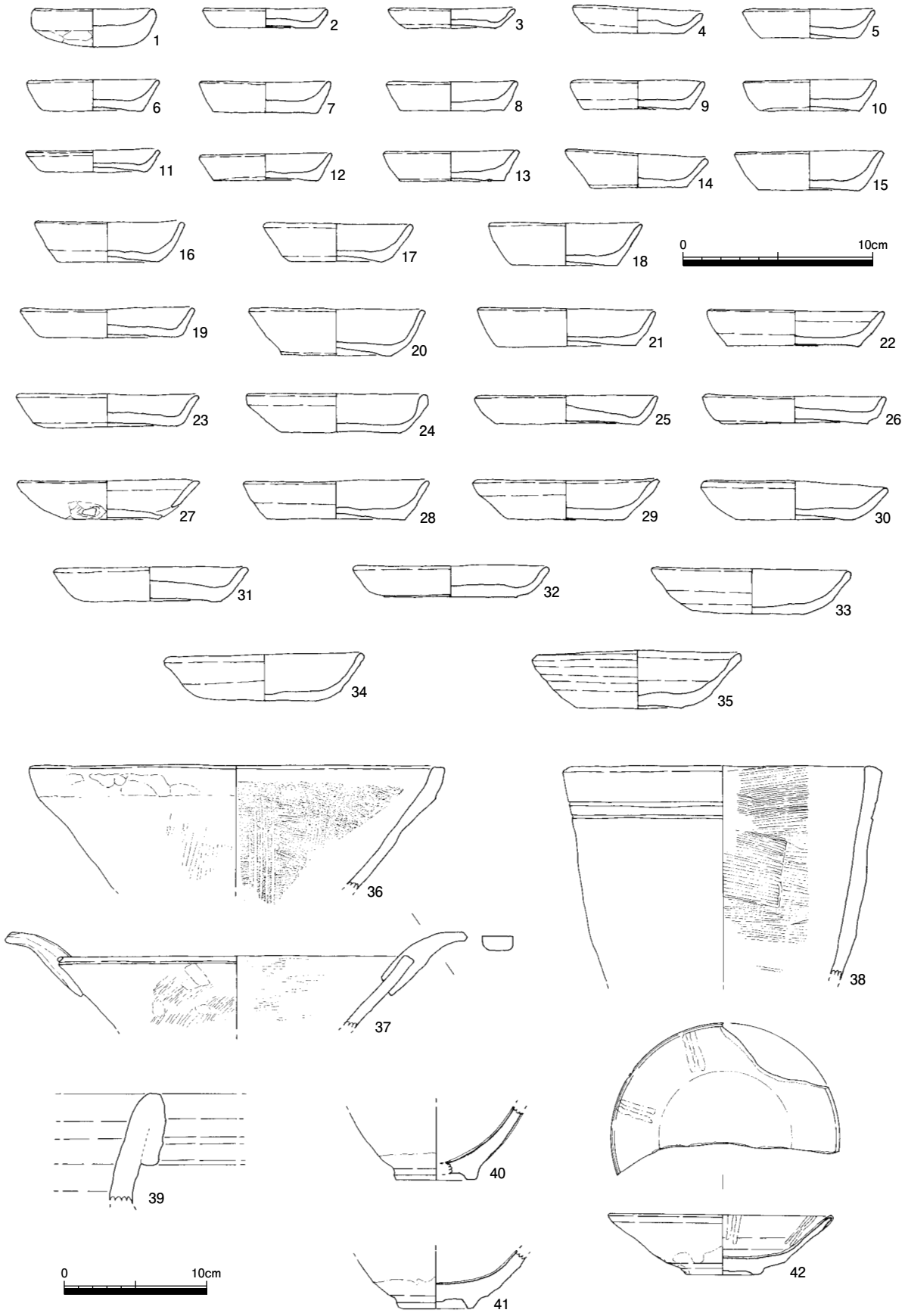
(１)土坑(SK)

以下、土坑として３基の遺構を報告するが、うち２基(SK002･004)は石積土坑である。

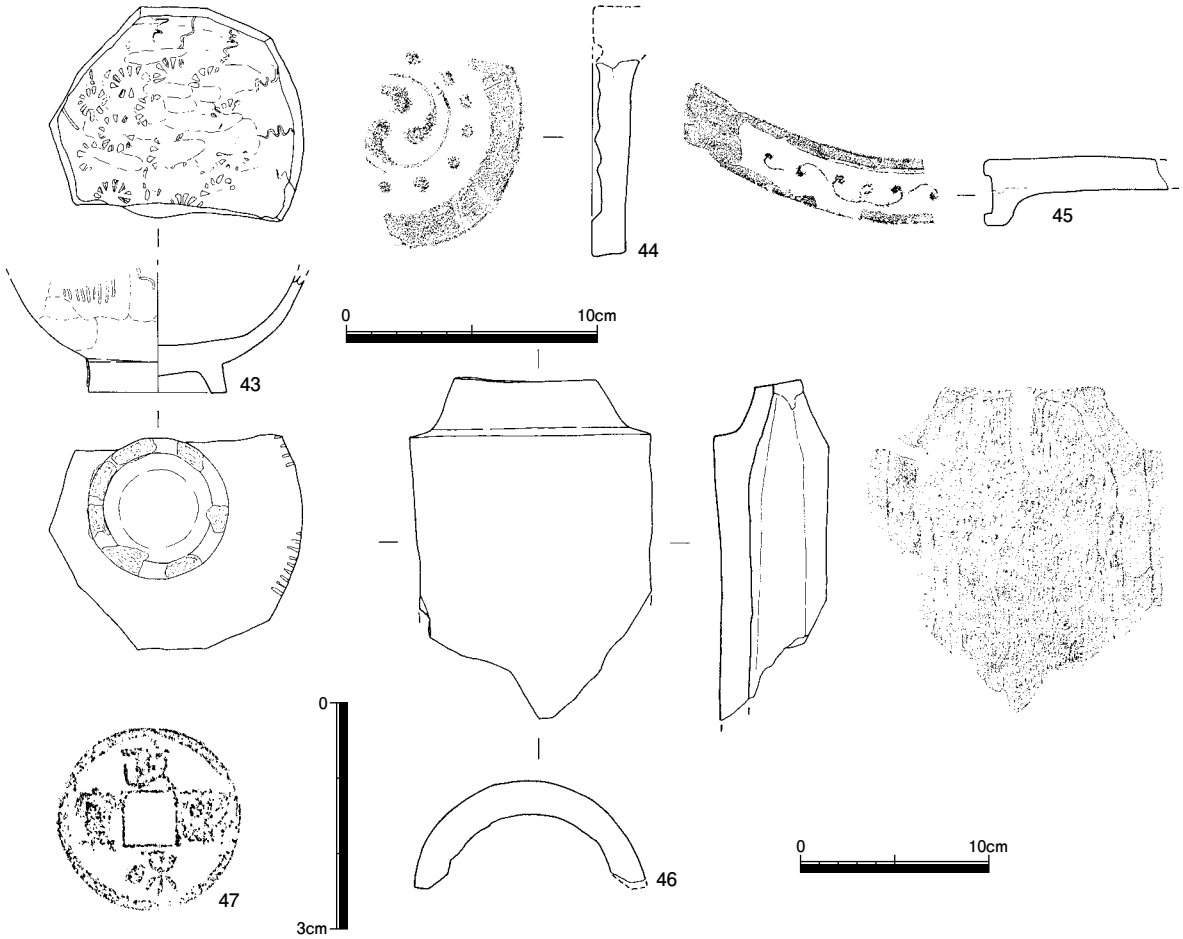
SK001(第６図)　調査区西端のＡ－２に位置する土坑で、北西側をSD006や撹乱に切られるため全容は不明であるが、現況で長さ2.8m以上、幅約2.5mの不整な隅丸方形を呈する。深さ0.1m程度しか遺存していないが、上層付近から完形個体を含む土師器小皿等が多数出土し、特に西側コーナー付近には土師器がまとまる。覆土は黄茶褐色土を主体とし、粗砂を含む。

出土遺物(第７･８図)　１～35は土師器で、１～18は小皿である。口径は6.4～8.0cmを測り、器高はやや高めのものが多い。１を除いて外底部は回転糸切りで、器面をヨコナデ調整する。また、色調は黄橙色が多い中で、１は赤褐色を呈し、器形も異質である。口径6.4cm、器高2.0cmを測り、底部は厚い。直線的に立ち上がる体部と底部の境界は鈍い稜線を有し、指オサエが残る。体部の内外面はヨコナデ、底部の内外面はナデ調整を施す。19～35は口径9.1～10.9cmを測る坏で、いずれも回転糸切り底で、内外面をヨコナデ調整する。この内27は体部下半に焼成前の不整形な穿孔を有する。36～38は瓦質土器である。36は擂鉢で、内面に刷毛目調整後、５条単位の擂目を施す。外面は刷毛目を粗くナデ

第６図　SK001実測図(１/40)



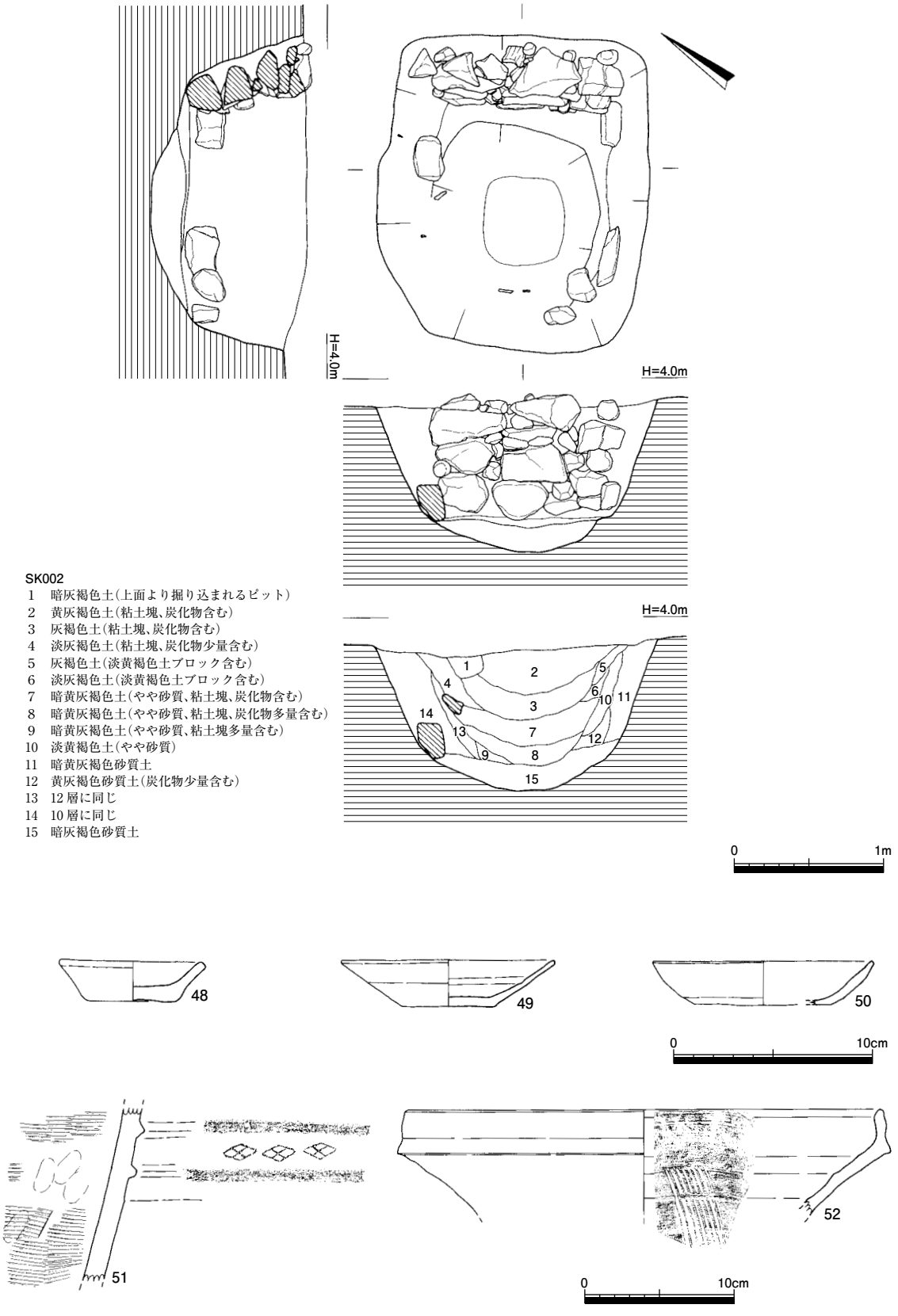
第７図　SK001出土遺物実測図（１）（36～39は１／４、他は１／３）



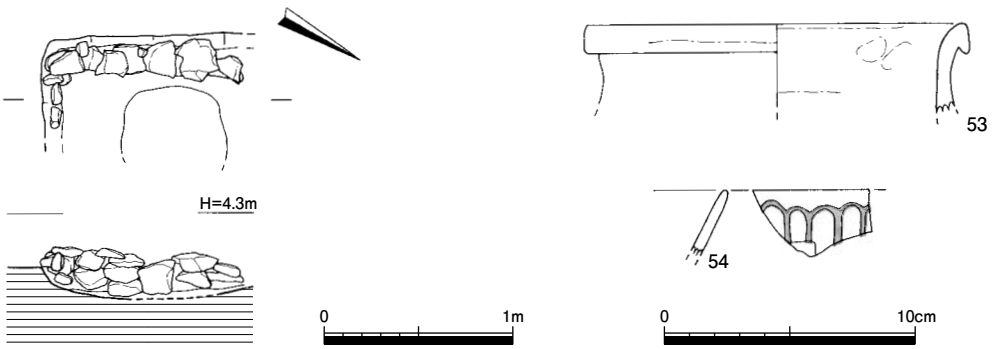
第８図　SK001出土遺物実測図（２）（43は１／３、47は１／１、他は１／４）

消す。37は復元口径24.8㎝を測る把手付鍋、いわゆる焙烙である。断面方形状の外反する把手は器面を挟み込むように貼付し、ナデを施す。器面は刷毛目調整を行うが、ナデを加える。38は円筒状の火舎で、内面は横方向の刷毛目で調整する。外面の大半は器面が剥落するが、口縁下に２条の沈線が残る。39～42は国産陶器で、39は備前焼、他は肥前陶器である。39は大甕口縁部片、40･41は碗、42は皿である。40～43は体部下半を露胎とし、42の内面には鉄絵を施す。43は朝鮮王朝の粉青沙器碗である。体部外面には櫛歯状、見込みには菊花形の印花と山形の象嵌が白土で施される。高台畳付きには目跡が７箇所残る。44～46は瓦である。44は左巻きの三巴文の軒丸瓦で、やや不整な円形の珠文を配する。瓦当裏面はナデ調整を行う。45は宝珠と思われる中心飾りを配する軒平瓦で、その基部から上下交互に３回反転する唐草文を有する。平瓦部はヘラナデを施す。46は玉縁式丸瓦で、凹面には布目とコビキＢの痕跡が認められる。凸面は丁寧なナデを行う。47は北宋代の銅銭「政和通寶」（初鋳年:1111年）である。他に鉄滓や羽口、獣骨等が出土している。以上の出土遺物から16世紀末頃の遺構と考えられる。

SK002（第９図）　Ａ－１で検出した石積の土坑である。長さ2.1m、幅1.8m、深さ1.0mを測る隅丸長方形の掘り方の北西壁面に４段の石積が認められたが、他の壁面には底面付近に礫が数個散在するのみであった。この石積にはやや大振りな花崗岩の角礫が主体として用いられ、玄武岩や礫岩が少量混じる。背面には小礫を裏込めしている。覆土中に崩落したと考えられる礫が少数出土したが、その数量から各面に石積があったとは言い難い。また、覆土中からは鉄釘が散在して出土しており、他の



第９図　SK002実測図(１/40)および出土遺物実測図(52は１/４、他は１/３)



第10図　SK004実測図(１/40)および出土遺物実測図(１/３)

三方は板組であった可能性もある。土層観察では、底面を整地した上で(15層)、壁面を構築し(10～14層)、中央部に空間を作り出していることがわかる。なお、１～９層は自然堆積で炭化物や粘土塊を含む。

出土遺物(第９図)　いずれも内部の堆積層から出土した遺物である。48～50は回転糸切り底の土師器で、48は小皿、他は坏である。順に復元口径は7.3、10.7、11.0㎝を測る。49は薄手の器壁で、小さな底部から直線的な体部が開く大内系の坏で、器面にはヨコナデが顕著である。51は瓦質土器の火舎で、断面蒲鉾状の突帯間に四つ割菱のスタンプ文を配する。内面は横方向の刷毛目が残る。52は備前焼の擂鉢で、８条の擂目を有する。これらの出土遺物から16世紀前半の遺構と推定される。

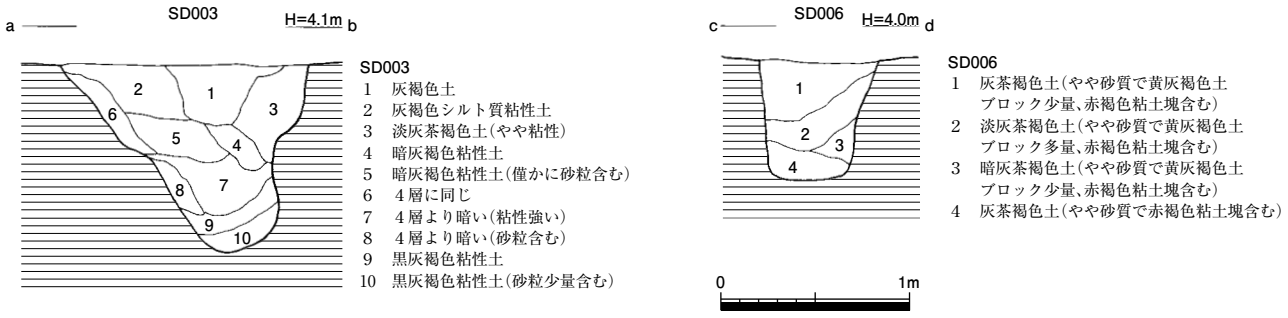
SK004(第10図)　Ｂ－１で確認した石積の土坑であるが、北側の大半を上面からの撹乱によって破壊され、「Ｌ」字状に一部のみが遺存する。現況から掘り方は方形を呈するものと思われる。石積は２～３段で高さ約0.2ｍが残り、花崗岩の角礫を多用して、小口積みを行う。

出土遺物(第10図)　53は陶器の壺で、口縁部を折り返して外面に面をなす。胎土は砂粒を含む黄白色で、褐色の鈍い発色の釉が外面に施される。54は明代の龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に細線と剣頭によるヘラ描き蓮弁文を有する。これ以外に出土遺物はない。16世紀代の遺構であろう。

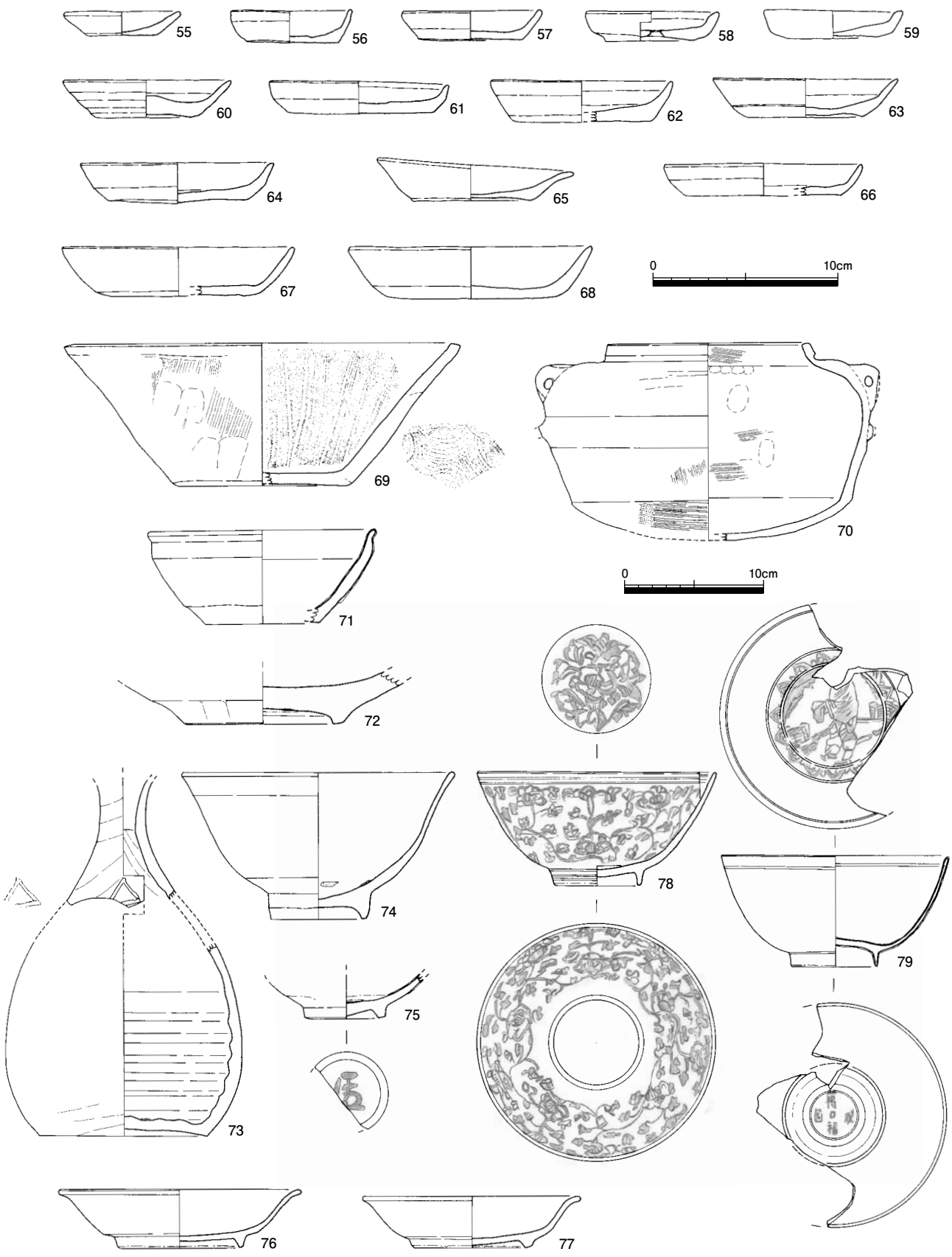
(２)溝(SD)

SD003(第11図)　調査区のほぼ中央のＡ－１・２に位置する直線的な溝で、Ｎ－54°－Ｅの方位に延び、幅1.3～1.5m、深さ0.5～1.0ｍを測る。南西側に端部があるが、北東側は調査区外に延伸する。急傾斜の壁面には鉄分の沈着が目立ち、硬化する。覆土は暗灰褐色粘性土を主体とし、砂を少量しか含まない。底面には凹凸が多く、壁面同様に鉄分が沈着する。

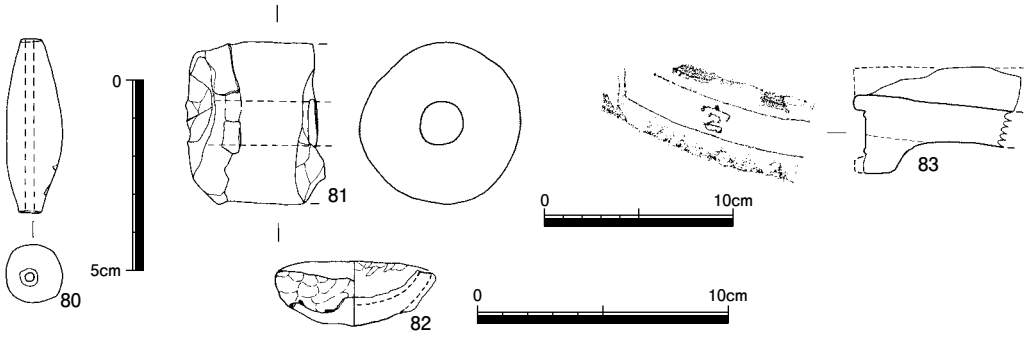
出土遺物(第12･13図)　55～68は回転糸切り底の土師器である。この内55～59は小皿で、口径は6.2



第11図　SD003･006実測図(１/40)



第12図　SD003出土遺物実測図（１）（69･70･73は１／４、他は１／３）



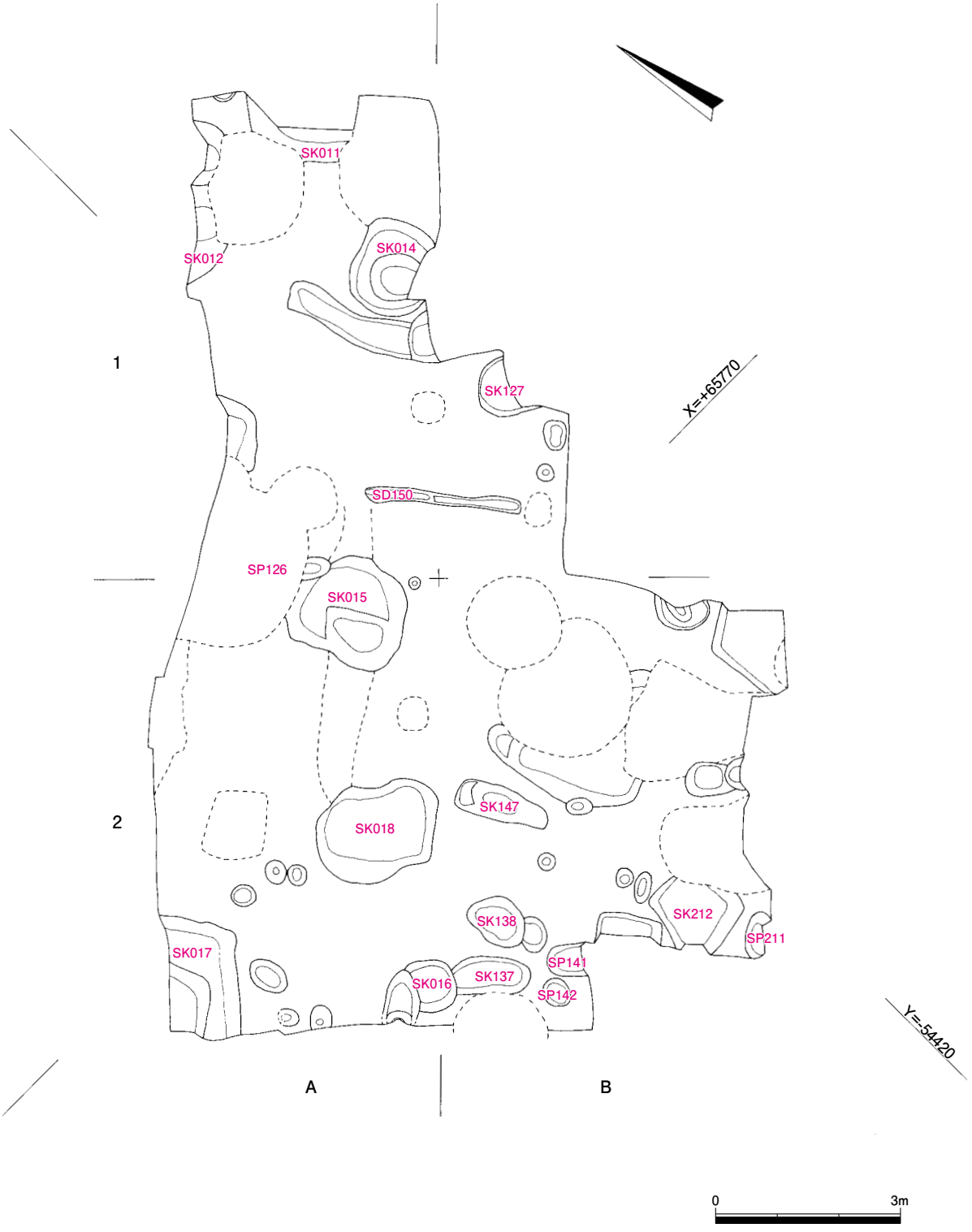
第13図　SD003出土遺物実測図（２）（80は１／２、82は１／３、他は１／４）

～7.5㎝を測る。58は外底部の焼成後の穿孔を有する。60～68は坏である。60～66は小形で口径は9.0～10.6㎝を測り、67･68は順に12.4、13.1㎝である。69･70は瓦質土器で、69は擂鉢である。口縁部上面は平坦で、僅かに内面に引き出す。体部内面には櫛状の、内底部には青海波状の擂目を施す。70は湯釜で、短い直立する頸部に断面台形状の肩の張る胴部が付く。底部との境界にはやや鈍い稜線を有する。頸部下の肩には四つ目菱のスタンプ文が並び、その下位には縦耳を一対貼付する。また、胴部中央には鍔が巡るが大半が欠損する。器面は細かい刷毛目による調整が行われるが、底部を除いてナデを加える。71～73は陶器である。71は瀬戸焼の天目茶碗で、直線的な体部は屈曲して外反する口縁部に続く。やや粗い胎土は淡黄橙色を呈する。72は鉢の底部であろう。淡赤橙色の胎土にオリーブ灰色の釉がやや厚目に掛けられる。73は備前焼の徳利瓶で、胴部上半を欠失するが、同一個体と思われる資料を図上復元したものである。肩部には太目のヘラ状工具による三角形の記号が認められる。内面の下半には整形時の凹凸が著しい。74～77は白磁で、74は碗、他は皿である。74の口縁部は僅かに外反し、鈍い黄白色の釉が全面に施釉される。見込みと畳付きに目跡を残す。75は皿Ⅲ－１類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。外底部に墨書を有する。76･77は端反りのもので、全面に施釉されるが、畳付きは釉を削り露胎とする。78･79は明代の青花磁器で、78は見込みが窪む碗Ｃ群である。口縁部の内外に２条の界線が巡り、外面には唐草文、圏線で囲まれた見込みには花卉文を描く。畳付きのみ露胎となる。79は見込みが盛り上がる碗Ｅ群で、口縁部の界線を除き体部は無文である。見込みには人物像が描かれ、高台内には「萬福攸同」銘款を有する。80は紡錘形の管状土錘である。完形品で、重量は84ｇを測る。81は径8.6㎝、孔径2.3㎝の鞴羽口である。先端部から幅２㎝程度はガラス質の熔着が著しい。82は坩堝と考えられるもので、口径6.4㎝、器高2.5㎝を測る浅い皿形を呈し、一部が切れ込む。底部は不安定な形状である。内面から口縁部外面にかけて 熔解物が厚く付着し、緑青が点在する。83は軒平瓦である。内区の周囲には細い界線を設け、左側に「宮」銘が認められる。暗灰色を呈し、須恵質の焼成である。他に保存状態の不良な漆器が出土した。以上の出土遺物から16世紀後半の溝に位置付けられよう。

SD006（第11図）　Ａ－２で検出した溝で、Ｎ－68°－Ｅに延伸する。北東側は近世井戸に切られ、南西側はSK001を切り、調査区外に延長する。断面は方形を呈し、幅0.25～0.4m、深さ0.3～0.6mを測る。底面は北東側に傾斜する。覆土は全体的に類似し、赤褐色の粘土塊を含む。出土遺物はいずれも細片で、土師器小皿･坏や土師質土器擂鉢、瓦質土器、中国陶器、明代青花磁器等がある。SK001との前後関係から16世紀末以降の溝である。

２）第２面

先述のとおり、６層途中の標高約3.4～3.5m前後に設定した面で、12～13世紀の遺構を主体に確認



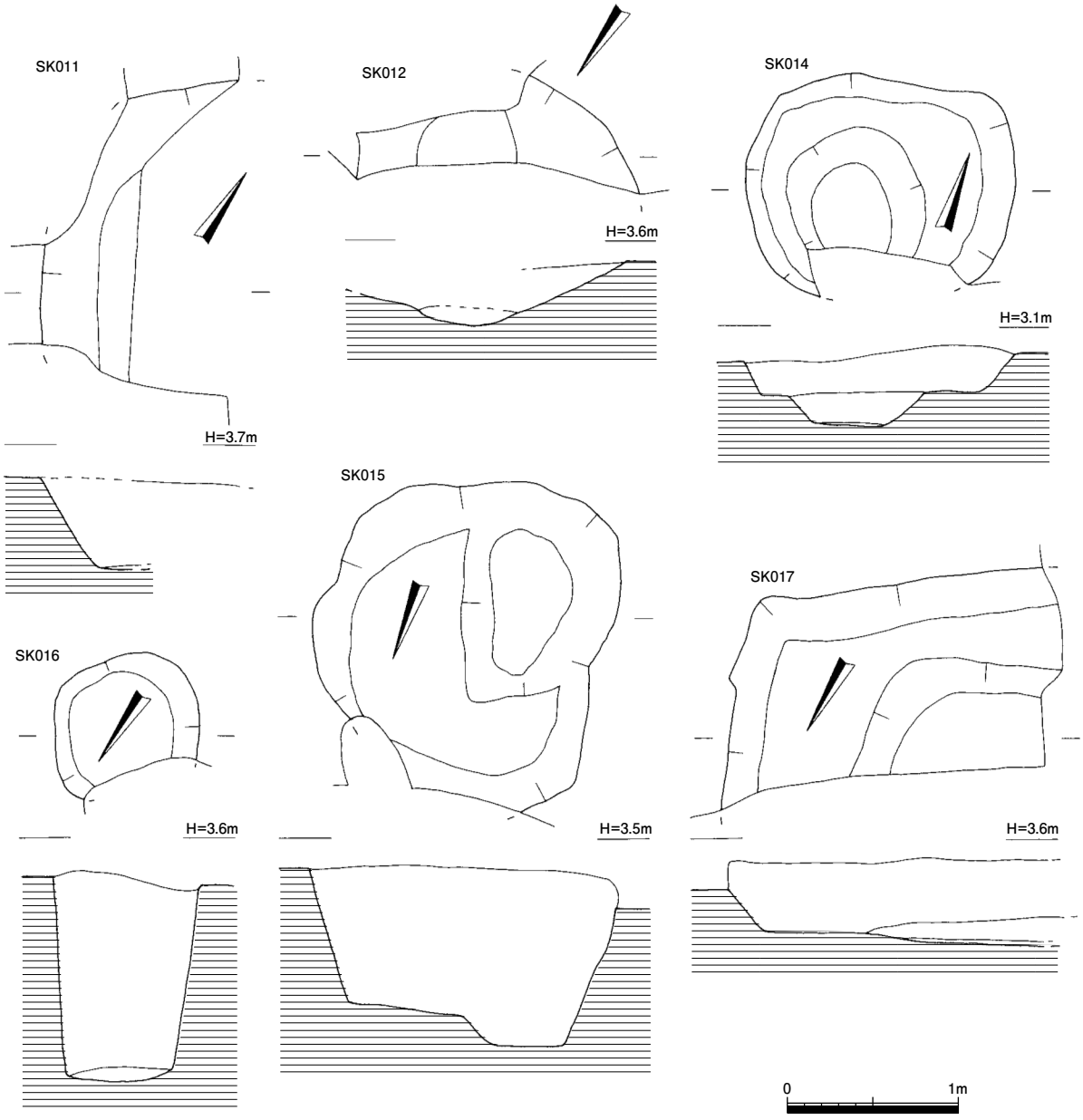
第14図　第２面調査区全体図（１/100）

した。この面では遺構プランが明瞭に検出できないものが多く、後述する第３面でプランを確認し、掘削した遺構も多い。

（１）土坑（SK）

SK011（第15図） 調査区北側の壁面際Ａ－１で検出した土坑で、大半が上面遺構に切られ、北東側が調査区外に位置するため、全容は不明である。現況で深さ0.55ｍを測る。覆土は黒褐色砂質土を主体とし、炭化物を含む。

出土遺物（第16図84～92） 84･85は回転糸切り底の土師器である。84は口径9.2㎝を測る小皿、85は口径15.0㎝を測る坏で、84のみ外底部に板状圧痕を有する。86･87は中国陶器である。86は鉢で、内傾する口縁部は肥厚し、目跡が残る。外面体部の屈曲部付近にも目跡が認められる。硬質の胎土は灰色を呈し、全面に明オリーブ灰色の釉が薄く掛けられる。87は壺の下半部で、回転ヘラ削りによって幅広の輪状高台を作り出す。鈍い赤褐色に発色する外底部を除き、オリーブ灰色の施釉がなされる。



第15図　SK011･012･014･015･016･017実測図（１/40）

胎土は86に類似する。88～91は白磁である。88は碗Ⅴ－４ａ類で、短く折れる口縁部上面は平坦である。見込みには明瞭な段を有する。体部下半以下には施釉されない。89は碗Ⅷ類であろう。厚目の底部には低い高台が付き、見込みには段状の沈線が巡る。白色の釉は高台際まで施される。90は見込みの釉を輪状にカキ取る碗Ⅷ－１類である。釉はややオリーブ色がかる。91は皿Ⅵ－１ａ類で、体部上位で鈍く屈曲し、その内面に段状の沈線を配する。胎土はやや軟質で、黄味のある釉が内面および外面の上半に施される。92は龍泉窯系青磁皿Ⅰ－１ｃ類で、見込みに片彫りおよび櫛状工具による文様を有する。外底部のみ釉を削り取り、露胎となる。全面に貫入が多い。他に同安窯系青磁や青白磁、須恵質の瓦等の細片が出土している。これらの出土遺物から12世紀後半の遺構と考えられる。

SK012（第15図）　Ａ－１の調査区壁面際に位置する。上面遺構等に切られ、北西側が調査区外に延びるため、詳細は不明である。現況での深さは0.4ｍを測り、炭化物を含む覆土は粘性のある暗灰褐色土を主体とする。

出土遺物（第16図93～97）　いずれも土師器で、外底部は回転糸切りである。93･94は小皿で、順に復元口径は6.5、7.8㎝を測る。93は板状圧痕を有し、内底部にナデを加える。95～97は坏である。順に口径は11.9、12.3、13.0㎝を測り、96のみに板状圧痕が認められる。他に白磁や同安窯系青磁、青白磁等が出土しているが、細片である。これらの出土遺物から13世紀末から14世紀前半の土坑と推定される。

SK014（第15図）　Ａ－１で確認した不整な楕円形状の遺構である。南側の一部が調査区外に位置するが、長径1.6ｍ、短径は1.3ｍに復元できる。深さ0.2ｍを測り、底面には径約0.8ｍ、深さ0.15ｍの円形の掘り込みを有する。覆土の主体は、やや粘性のある黒灰色砂質土である。

出土遺物（第16図98～100）　98･99は回転糸切り底の土師器で、98は復元口径8.6㎝の小皿である。99は坏で、外底部には板状圧痕が認められる。共に内底部にナデを加える。100は径6.2㎝、孔径3.4㎝を測る鞴羽口で、外面はヘラナデ調整を行う。端部は被熱によりガラス質を呈する。他に高麗陶器、中国陶器、白磁碗Ⅴ類等の細片が出土している。12世紀後半から13世紀前半の土坑であろう。

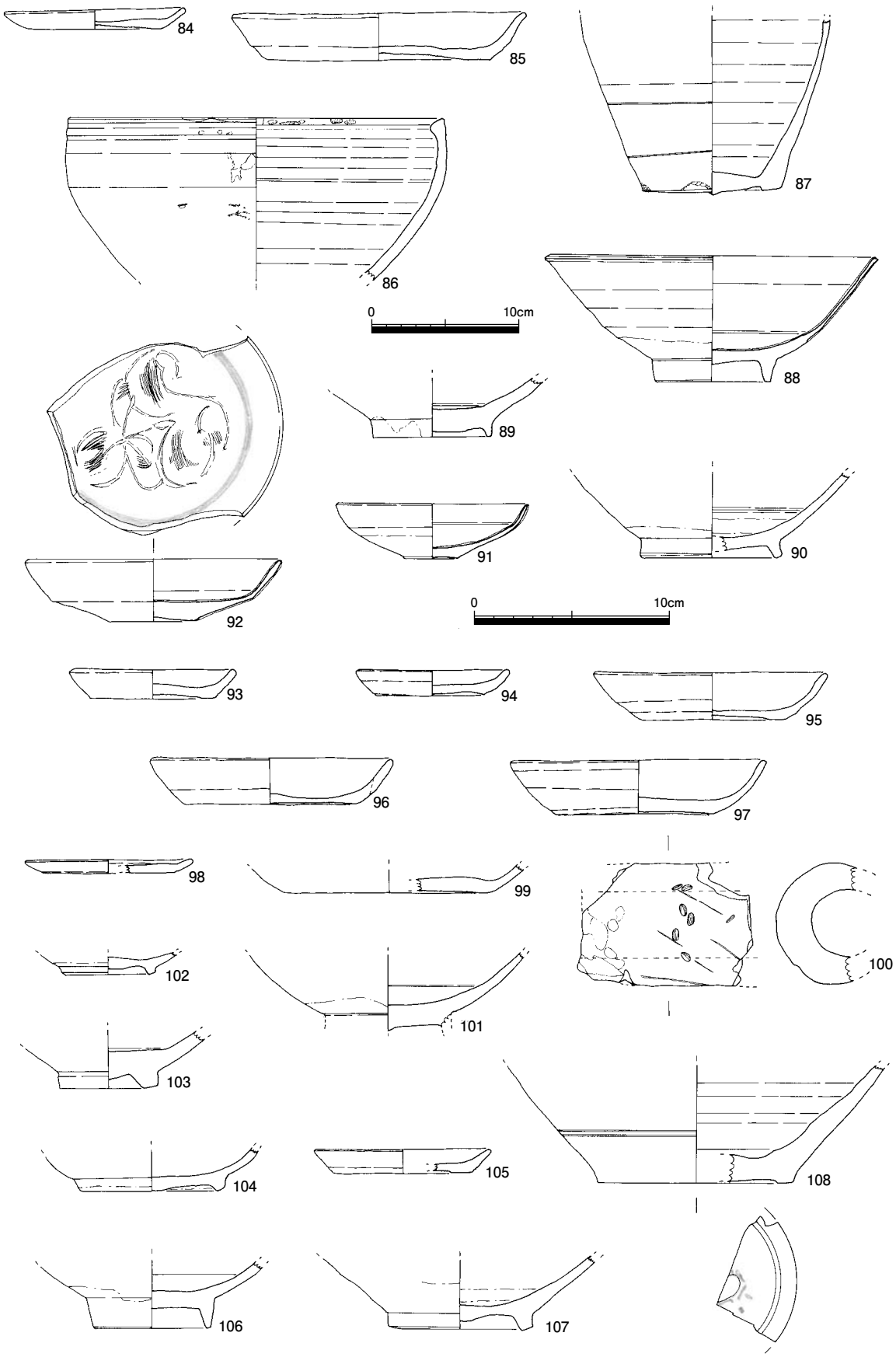
SK015（第15図）　Ａ－１･２で検出した不整な方形プランの土坑で、北側をSP126や上面の遺構に切られる。長さ1.8ｍ、幅1.6ｍ、深さ0.8ｍを測り、底面の南西隅に深さ0.15ｍの掘り込みが認められた。覆土は茶褐色砂質土を主体とするが、下層では黄褐色砂と灰色粘性土の互層となる。

出土遺物（第16図101～103）　101･102は白磁である。101は高台の大半を欠失するが、碗Ⅴ類であろう。見込みに段を有し、濁った白色の釉が高台近くまで施釉される。器面には貫入やピンホールが目立つ。102は皿Ⅲ－１類で、見込みの釉を輪状に削る。高台は露胎である。103は無文の同安窯系青磁碗で、見込みに深い段を有する。光沢のある淡緑色の釉が内面に掛かる。他に回転糸切り底の土師器や弥生土器等の細片が出土している。12世紀後半から13世紀前半の土坑であろう。

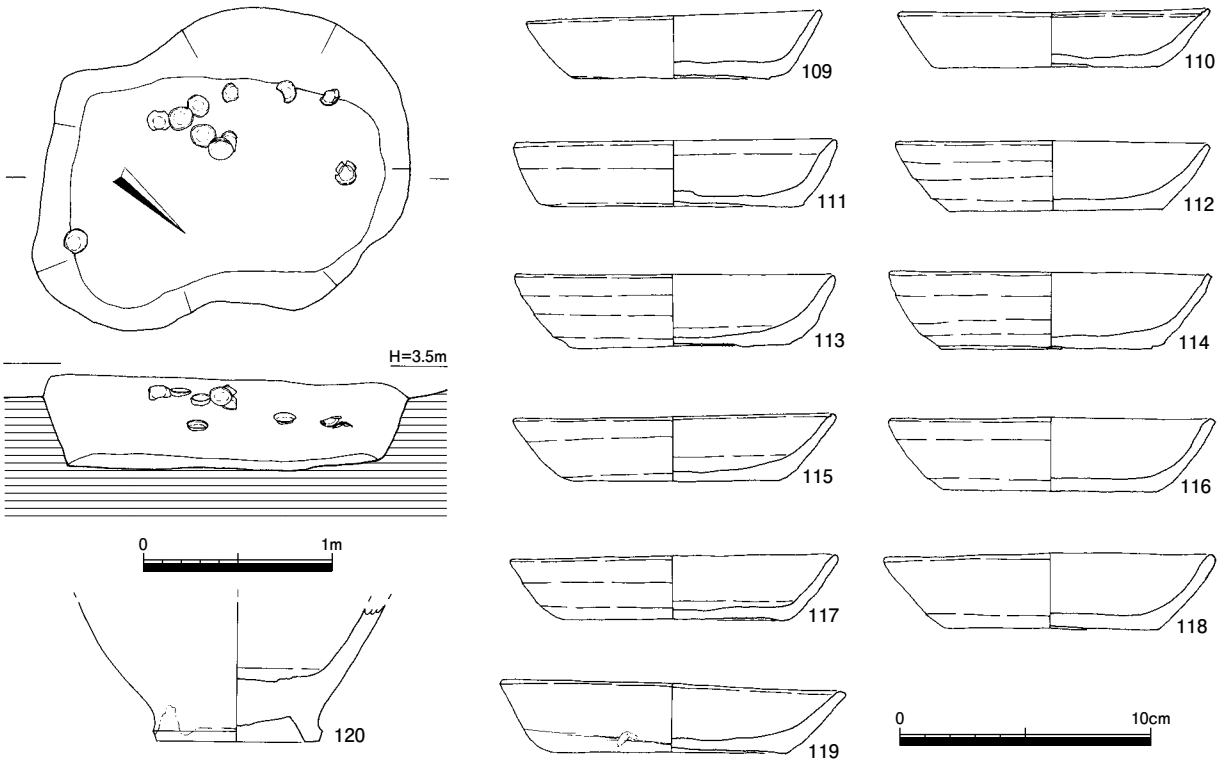
SK016（第15図）　調査区南西端のＡ･Ｂ－２に位置する。径0.9ｍの円形プランを呈し、北西側を別遺構に切られ、SK137を切る。壁面は直立し、深さ1.2ｍを測る。覆土は中位に黄褐色砂を薄く挟み、その上層は暗褐色砂質土、下層は暗褐色砂質土と黄褐色砂の互層となる。

出土遺物（第16図104）　低い高台を貼付する白磁碗で、内外面に明白色の釉が施されるが、畳付きの釉は削り取る。他に明代の龍泉窯系青磁や青花磁器等が出土している。15～16世紀に位置付けられ、第１面の検出遺漏の遺構であろう。

SK017（第15図）　調査区の西側隅のＡ－２で確認したが、大半が調査区外に位置する。現況で隅丸方形を呈するものと推定され、深さ0.5ｍを測る。底面には鈍い段があり、僅かに低くなる。覆土は黄灰色粘性土ブロックを含む茶褐色砂質土を主体とし、底面の窪み部分には黒褐色砂が認められた。



第16図　SK011･012･014･015･016･017出土遺物実測図(86･87は１/４、他は１/３)



第17図　SK018実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３）

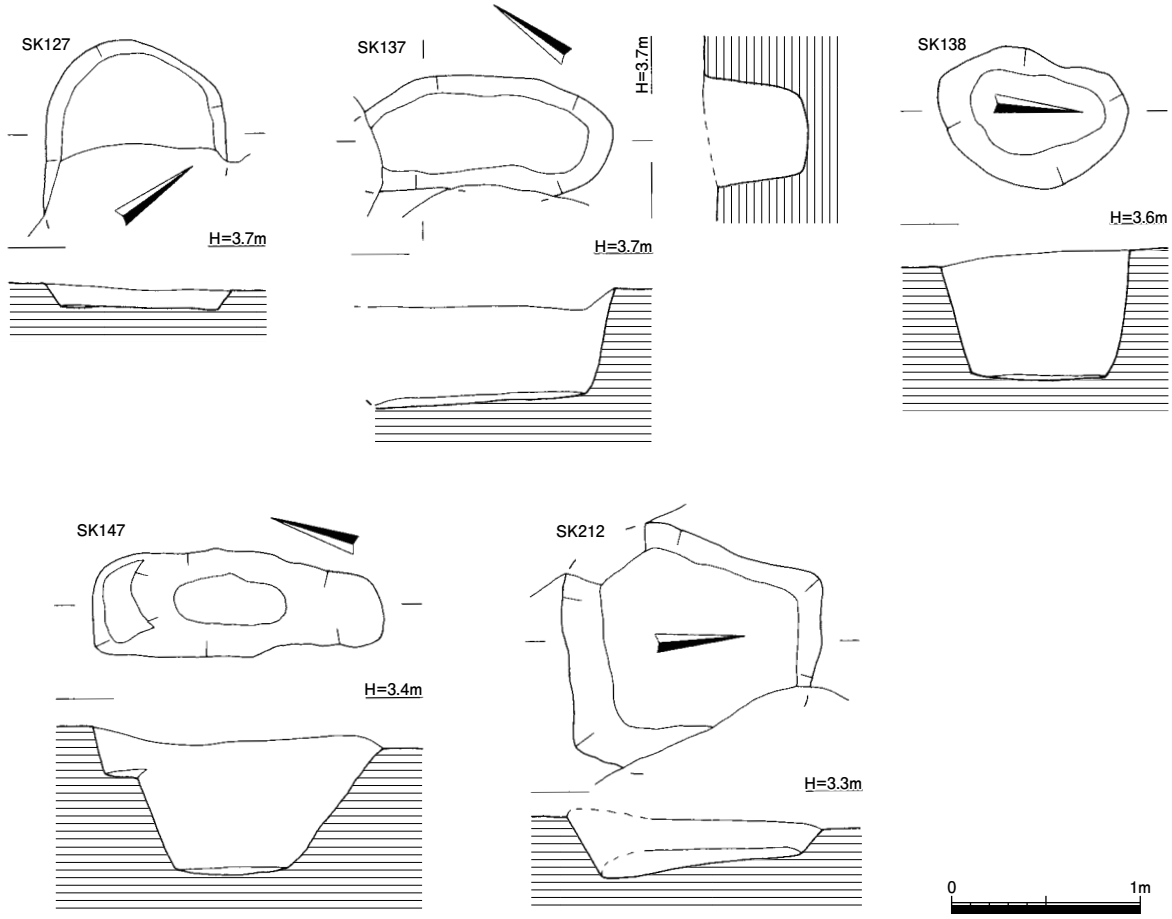
出土遺物（第16図105～108）　105は復元口径9.0㎝を測る土師器小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕が認められる。106～108は白磁で、106･107は碗である。106はⅤ類で、見込みに浅い段が巡る。やや灰色がかった釉が施される。107はⅧ－１類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。釉調は106に類似する。108は壺であろう。低い輪状高台を削り出し、外面下半には沈線が２条巡る。釉はやや黄味のある白色で､外底部は畳付きを含めて施釉されない。外底部には不鮮明ながら墨書が認められる。他に回転ヘラ切り底の土師器１点、須恵質土器、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁等の細片が出土している。以上から12世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SK018（第17図）　Ａ－２で検出した不整な方形状の土坑である。長さ1.9m、幅1.6m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は黒灰色砂質土を主体とし、南西側の上層に遺存状態の良好な土師器の坏が廃棄されていた。

出土遺物（第17図）　109～119は回転糸切り底の土師器坏である。口径は11.6～13.6㎝を測り、平均は12.7㎝である。112･116を除き、板状圧痕を有する。また、112･116は内底部にナデを加えない。120は白磁壺で、底部は厚みがある。高台の外面は幅の狭い面取りを行い、その端部まで釉が掛かる。見込みには重ね焼きの際の高台跡が熔着する。他に中国陶器、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同安窯系青磁等の細片や、鉄釘、錆化の著しい銅銭が出土している。以上から13世紀中頃の遺構に位置付けられよう。

SK127（第18図）　Ｂ－１の調査区際に位置し、東側は調査区外に延びる。現況で楕円形プランをなすものと推定される。断面は逆台形を呈し、深さは0.1mを測る。覆土は茶褐砂質土を主体とする。

出土遺物（第19図121～125）　全て回転糸切り底の土師器で、121を除き、板状圧痕が認められる。121･122は小皿で、順に復元口径は7.7、8.2㎝を測り、123～125は坏で、同様に12.4、13.0、13.0㎝である。他に白磁碗Ⅳ類､須恵質の瓦等の細片が出土している。以上から13世紀中頃の土坑と推定される。



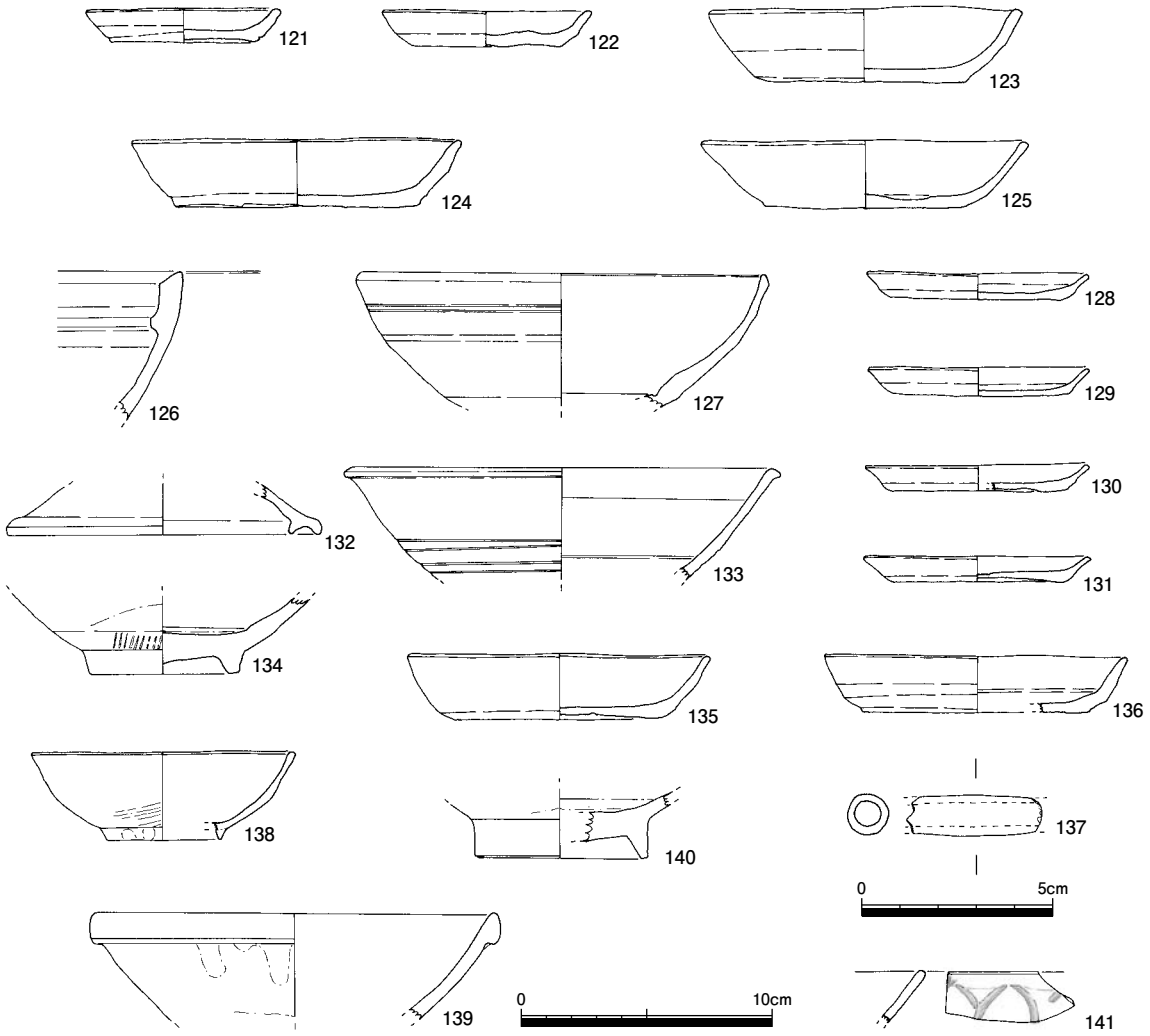
第18図　SK127･137･138･147･212実測図（１/40）

SK137（第18図）　調査区南西端のＢ－２で確認した長楕円形状の土坑である。南西側を撹乱に、北西側をSK016に切られるが、長径約1.4m、短径約0.6mの規模と思われる。壁面の立ち上がりは急で、深さ0.6mを測る。底面はほぼ平坦で、覆土は黒灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（第19図126･127）　126は中国陶器の鉢である。口唇部は強く内傾し、凹面をなす。その下位に断面三角形状の突帯を１条有する。胎土には砂粒を多く含み、器面は灰赤色を呈する。内外面に施釉されない。127は白磁碗Ⅱ－２類であろう。口縁部は小振りな玉縁を呈し、体部下半に稜を有する屈曲部がある。その内面には段状の沈線が認められる。白色の軟質な胎土に黄味を帯びた釉が薄く施される。他に回転糸切り底の土師器や同安窯系青磁の細片が出土している。12世紀後半代の遺構と推定される。

SK138（第18図）　SK137の北東側のＢ－２で検出した。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.7mを測る。壁面の傾斜は急で、底面は平坦である。覆土は黒灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（第19図128～134）　128～131は回転糸切り底の土師器小皿で、いずれも板状圧痕がなく、内底部にナデ調整を加えない。復元口径は8.7～9.0cmを測る。いずれも良好な焼成で、色調は黄橙色を呈する。132は復元口径12.4cmを測る須恵器坏蓋の蓋で、混入品である。かえりは断面三角形で、端部はシャープである。133･134は白磁で、133は碗Ⅴ－４類である。釉色はやや黄味を帯びる。134は碗Ⅷ－２もしくは３類で、見込みの釉を輪状にカキ取り、段を有する。他に白磁碗Ⅳ類、青磁片が



第19図　SK127･137･138･147･212出土遺物実測図(137は１/２、他は１/３)

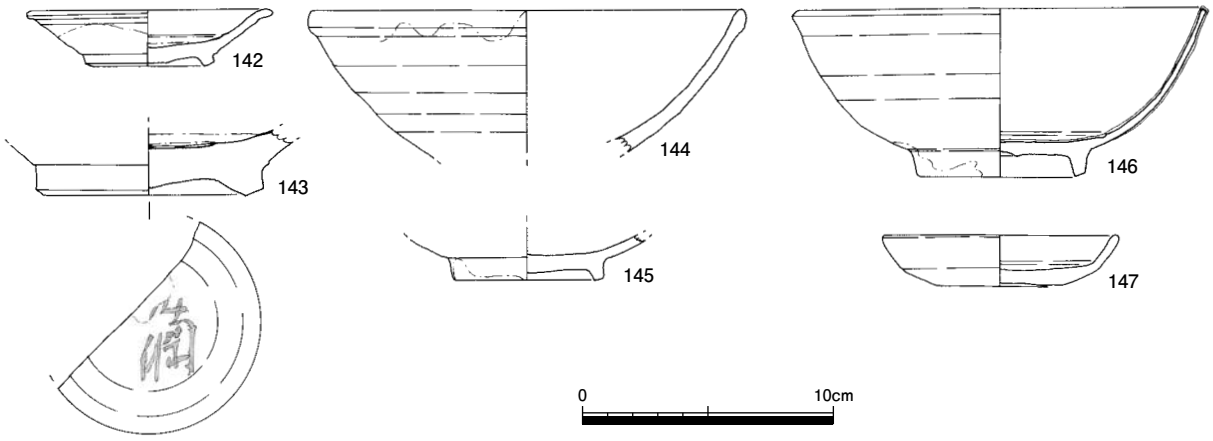
出土した。12世紀後半から13世紀前半に位置付けられよう。

SK147(第18図)　Ｂ－２に位置する長方形プランの土坑である。長さ1.5m、幅0.55m、深さ0.7mを測る。断面は逆台形を呈し、北側には狭いテラスを有する。覆土は黒灰色砂質土を主体とする。

出土遺物(第19図135～137)　135･136は共に口径12.0㎝を測る回転糸切り底の土師器坏である。135のみ板状圧痕があり、内底部の中心に僅かなナデが残る。137は管状土錘で、両端部を欠損する。他に中国陶器、白磁碗Ⅳ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類等の細片が出土した。13世紀代の遺構であろう。

SK212(第18図)　調査区南端のＢ－２で確認した。遺構の南西部は調査区外に位置し、東側を撹乱されるものの､現況からやや不整な隅丸方形の平面プランを呈するものと考えられる｡長さ1.4m､幅1.3m前後で、深さは0.3mを測る。断面は逆台形をなし、底面は南側に緩く傾斜する。覆土の主体はやや粘性のある暗灰褐色土である。

出土遺物(第19図138～141)　138は復元口径10.4㎝を測る土師器の小椀である。器壁の薄いやや丸味のある体部に断面三角形の低い高台を貼付する。内外面を平滑に仕上げる。139･140は白磁である。139は玉縁状の口縁を呈する碗Ⅳ類、140は碗Ⅷ－１類で、見込みの釉を環状に削る。141は龍泉窯系



第20図　SD150およびSP126･141･142･211出土遺物実測図（１／３）

青磁碗Ⅱ－ａ類である。体部外面に片彫りによる蓮弁文を施すが、鎬はない。他に回転糸切り底の土師器や中国陶器、龍泉窯系青磁碗の細片が少量出土している。13世紀前半の遺構と考えられる。

（２）溝（SD）

SD150（第14図）　調査区ほぼ中央のＡ･Ｂ－１で検出した小規模な溝である。長さ2.5m、幅0.2m、深さは0.2～0.3mを測り、断面は「Ｕ」字形を呈する。北西側に鈍い段落ちがあり、やや深くなる。覆土はやや粘性のある黄灰色土である。

出土遺物（第20図142）　白磁Ⅲ－１類で、口縁部は緩く外反し、断面方形の低い高台が付く。見込みの釉を輪状にカキ取るが、露胎部分に炭化物が吸着する。また、中央部は被熱の痕跡が認められる。他に回転糸切り底の土師器や白磁碗Ⅳ類、須恵質土器の細片が出土している。12世紀後半の溝と推定される。

（３）ピット（SP）

ここでは、第２面ピット出土遺物をとりまとめて報告する。

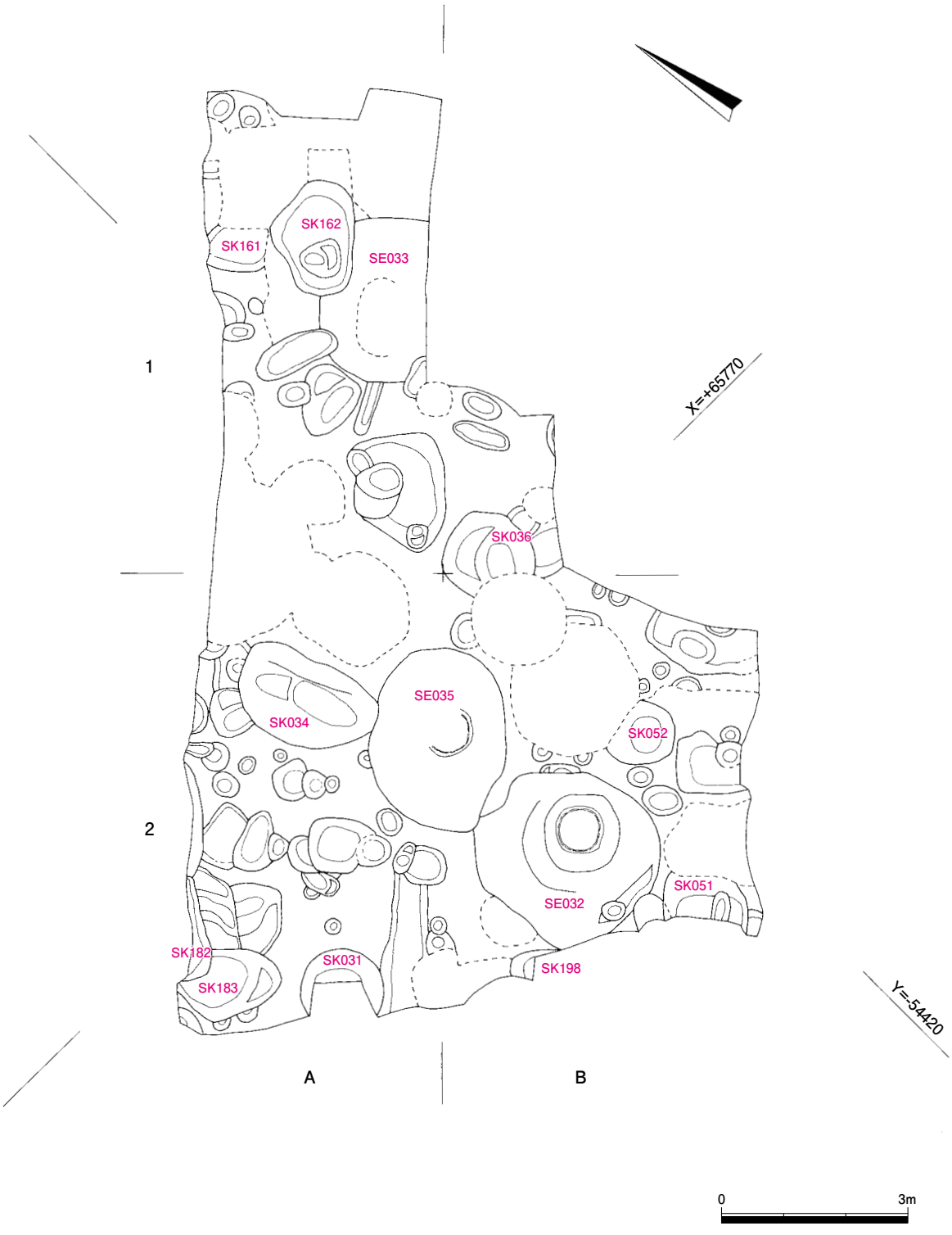
出土遺物（第20図143～147）　143はＡ－１に位置するSP126から出土した同安窯系青磁碗で、Ⅲ－２類と考えられる。見込みの釉を輪状に幅広くカキ取り、高台は外側を削る。外底部には「□綱」の墨書が記される。なお、SP126はSK015を切るピットである。144･145はＢ－２のSP141から出土した遺物で、共に白磁である。144は碗Ⅳ類、145は碗Ⅵ類であろう。高台は断面台形状で低く、その際まで青味のある釉が掛けられる。146はＢ－２で検出したSP142出土の白磁碗Ⅴ－３類である。口縁端部は僅かに外反して納める。見込みは広く、段状の沈線を配する。釉は光沢のある白色で、一部が高台際まで施される。147はＢ－２のSP211出土の白磁Ⅲ－１a類である。体部は中位で鈍く屈曲し、その内面には段を有する。見込みは広く平坦である。厚めの釉が全面に掛けられるが、外底部の釉は削り取る。

３）第３面

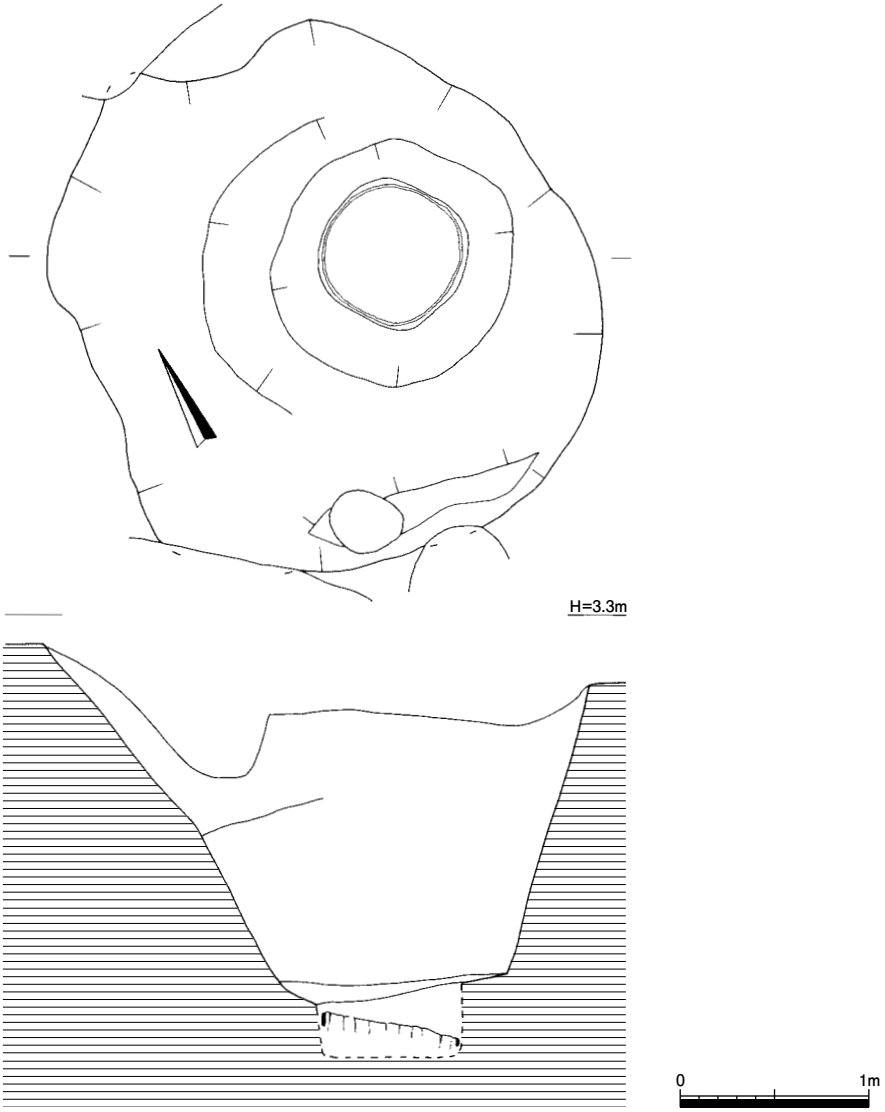
先述のとおり、砂丘基盤層で行った最終の調査面である。この面では、第２面での検出が困難であった遺構を含めた調査を実施した。

（１）井戸（SE）

SE032（第22図）　Ｂ－２で確認した井戸で、南西側壁面の一部が調査区外に位置するが、ほぼ全容が把握できる。隣接するSE035とは僅かに重複し、本遺構が先行する。平面プランはやや不整ながら



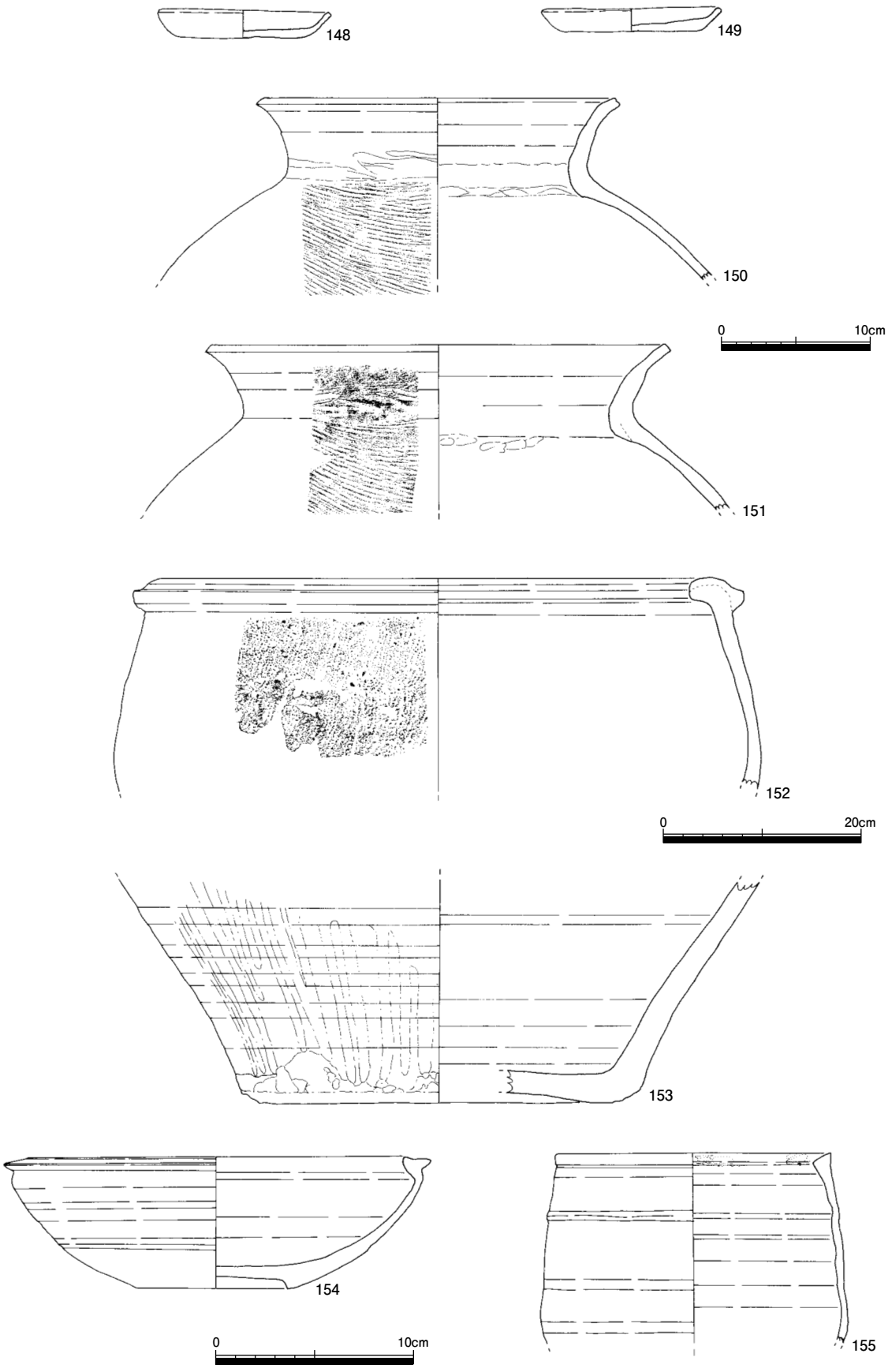
第21図　第３面調査区全体図（１/100）



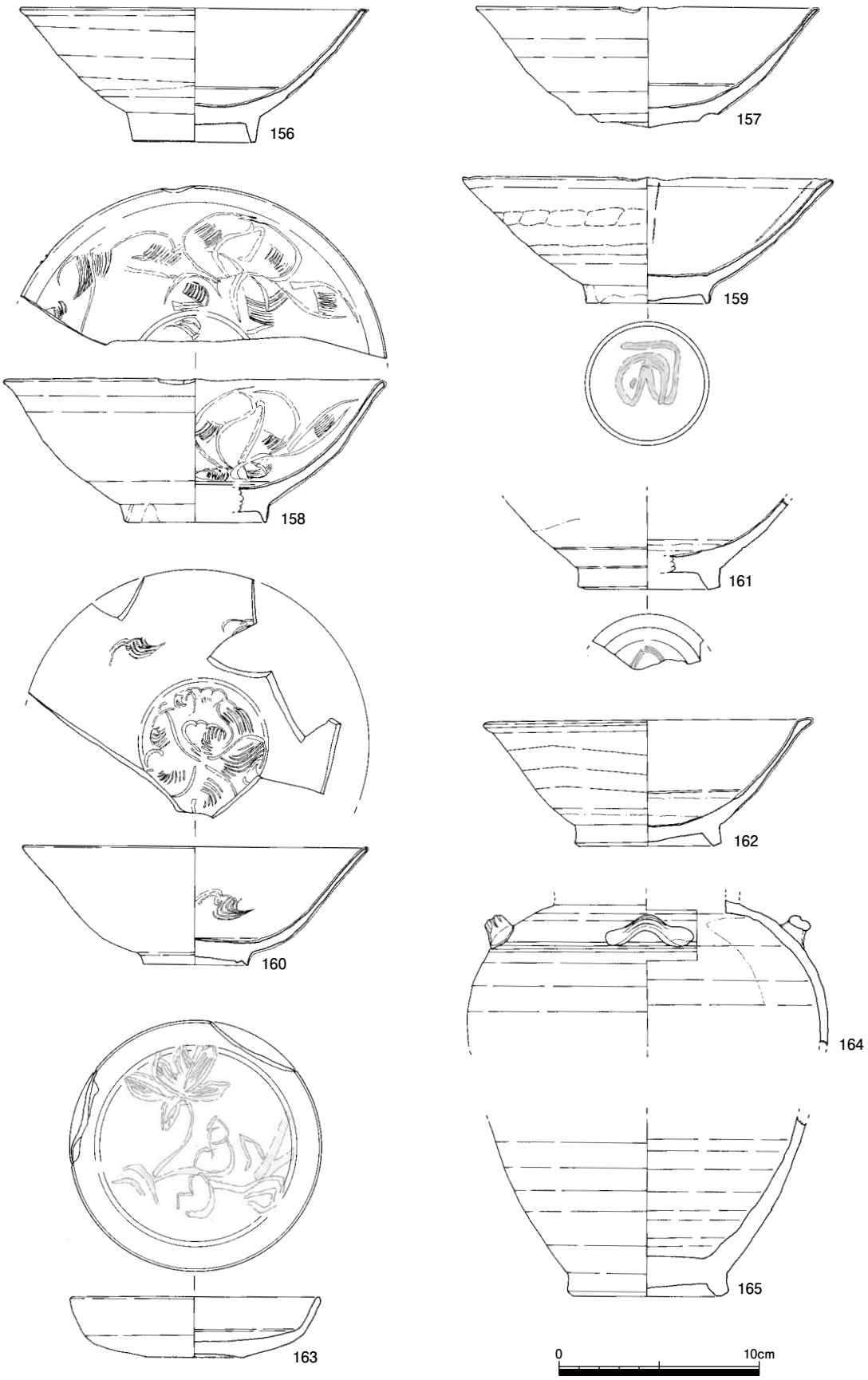
第22図　SE032実測図（１/40）

円形を呈し、径約2.9ｍを測る。上面からの深さ約1.7ｍに平坦面を設け、その中央に井筒の下部を据える径0.8ｍの円形の掘り込みを有する。その内部には径0.7ｍを測る水溜用の木桶を検出したが、腐朽が著しい。なお、標高約１ｍ付近で湧水する。掘り方の覆土は、汚れた黄褐色砂を主体に灰褐色土小ブロックが混じる。また、上面から約1.3ｍ下げた付近から円形を呈する暗灰褐色砂質土の井筒痕跡が確認できた。その内部から多数の輸入陶磁器に加え、拳大から人頭大の礫が出土した。井戸の廃棄に伴う行為であろう。

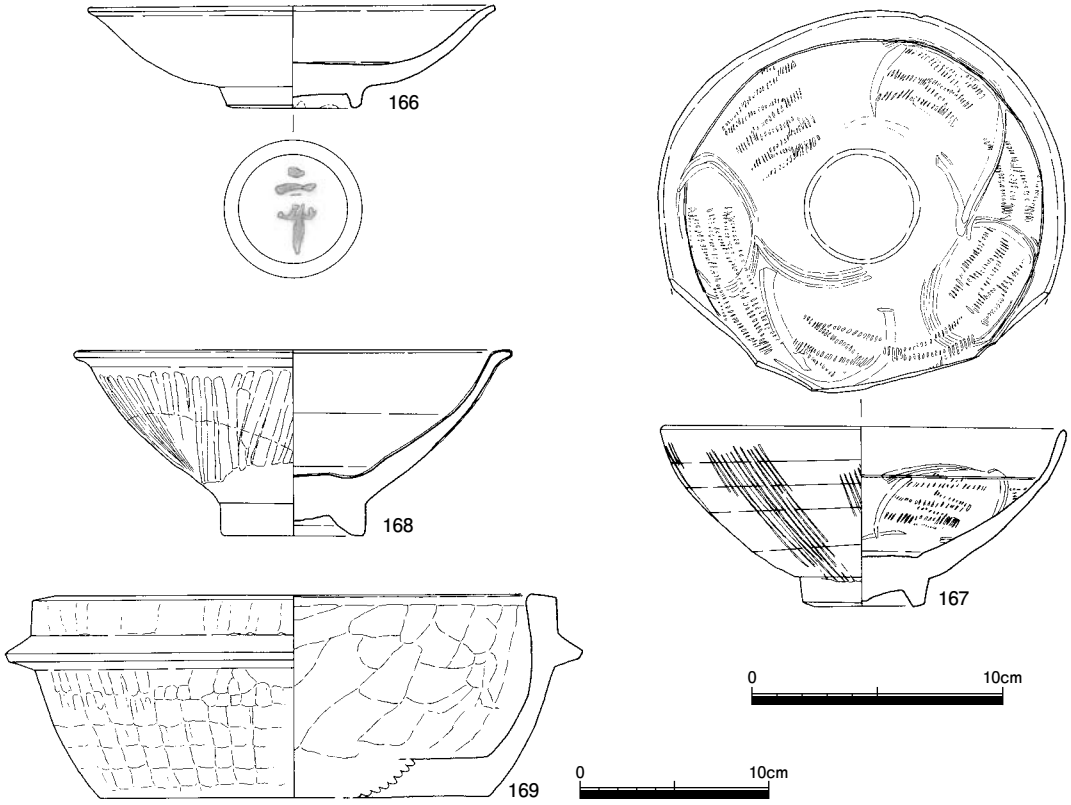
出土遺物（第23･24･25図）　161のみ掘り方上層出土であるが、他は上述の井筒痕跡から出土した遺物である。148･149は土師器小皿で、共に外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。順に口径は8.7、9.0㎝を測る。胎土には金雲母を含む。150･151は器形や調整が類似した須恵質土器の甕であるが、復元口径が異なる。共に丸味のある体部に頸部から「く」字状に外反する口縁部が続き、口唇部は外傾する面取りを行う。体部外面は右下がりの平行叩きを施し、口縁部内外面にはヨコナデ調整を行う。頸部は内外面を平滑にナデつけ、体部内面はナデを行う。内面に当て具の痕跡は見えない。胎土には砂



第23図　SE032出土遺物実測図（１）（150･151･153は１／４、152は１／６、他は１／３）

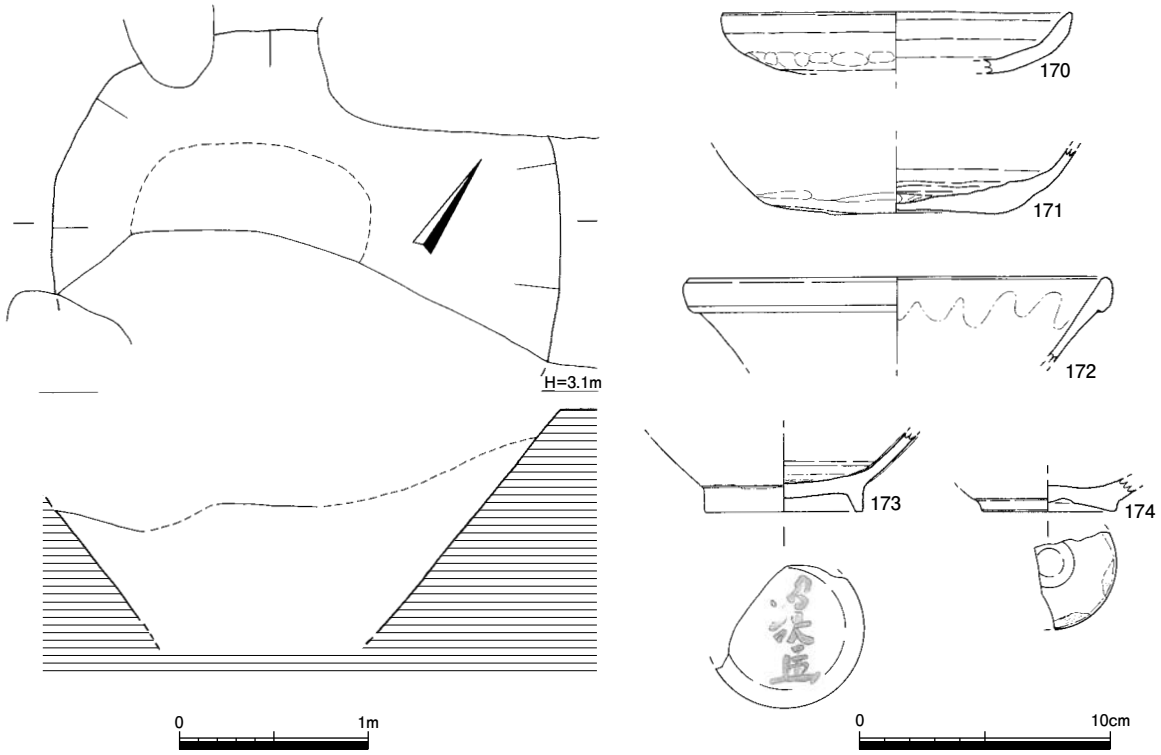


第24図　SE032出土遺物実測図（２）（１／３）



第25図　SE032出土遺物実測図（３）（169は１／４、他は１／３）

粒を少量含み、堅緻な焼成である。151の外面には自然釉が認められる。十瓶山系須恵器と推定される152～155は中国陶器である。152は大形の甕で、「Ｔ」字状を呈する口縁部は強く外傾し、内側への張り出しが大きい。胴部には張りがある。粗い胎土の中心は暗灰色を呈するが、器面は鈍い暗赤褐色である。内外面に暗オリーブ黄色の釉が施されるが、十分に熔けきれず、暗褐色のダマが器面全体に認められる。なお、口縁部上面は施釉後に拭き取る。胴部外面には平行叩き目、内面には施釉のため不鮮明であるが、同心円状の当て具痕が残る。復元口径は62.2㎝を測る。153は甕の底部である。胎土は灰色～淡褐色をなし、砂粒を多く含む。体部外面には褐色の釉を流し掛けする。154は碁笥底の浅い鉢である。「Ｔ」字状の口縁部の外側は尖り、内側は鈍い面をなして納める。茶褐～暗オリーブ色の釉が薄く全面に施され、胎土は淡褐色を呈する。155は無頸壺で、内傾する口縁部上面には目跡を残す。淡灰色の緻密な胎土の内外面にやや光沢のあるオリーブ黄色の釉が掛けられる。156～165は白磁である。156･157は碗Ⅴ－４ａ類で、見込みに浅い沈線が巡り、体部下半は露胎である。157の内面には貫入が多い。158～160は碗Ⅶ類である。158はⅦ－ｂ類のもので、口縁部に輪花を施し、内面に片彫りおよび櫛状工具による施文を有する。見込みにはやや深い沈線が巡る。高台際まで白色の釉が掛かる。159の高台は低く、先細る。見込みを主体にヘラおよび櫛状工具によって草花文が描かれる。釉は僅かに青味を帯びる。160は輪花を有し、内面を白堆線で分割するⅦ－ｃ類である。見込みの沈線は深く、外底部には墨書が認められる。161･162は見込みの釉を輪状に削り取る碗Ⅷ－１類で、体部下半には施釉されない。161の外底部には墨書の一部が残る。162の口縁部上面は平坦な面をなす。163はⅢⅧ－２類で、体部中位で屈曲し、広い見込みには草花文が施される。外底部のみ露胎である。

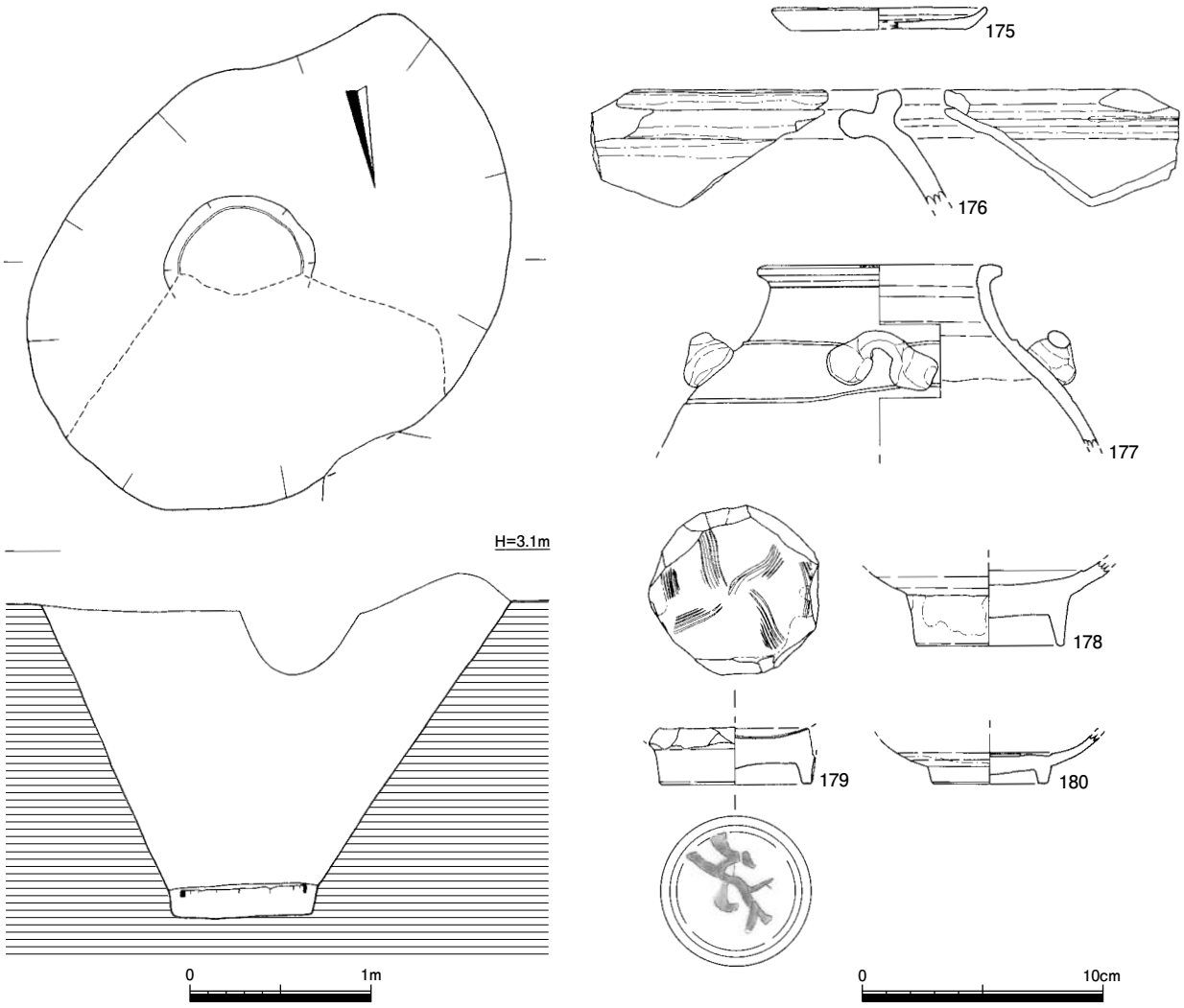


第26図　SE033実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３）

164･165は壺である。164は丸味のある肩部に横耳を貼付し、頸部の屈曲部内面には鋭い稜を有する。釉調はやや青味を帯びる。165下半部の資料で、高台端部外面は面取りを施す。内面には化粧土が掛けられる。166～168は青磁で、166は龍泉窯系の浅形碗Ⅰ－１類で、口縁端部は短く外反し、丸く納める。見込みには段を有する。淡緑色の釉は畳付きから高台内に一部がおよぶ。外底部には「二田」の墨書が記される。167･168は同安窯系青磁碗である。167はⅠ－１ｂ類で、外面には縦方向の櫛目文、内面には片彫りと櫛状工具による施文を有する。小さな見込みには深い圏線を施す。168は口縁部を外反させ、外面に幅の広い櫛目を有するⅢ－１ａ類である。内面および外面上半に淡茶褐色の釉が掛けられる。胎土はやや軟質である。169は断面台形状の鍔を削り出す滑石製石鍋で、外面の鍔下端以下には煤の付着が著しい。口径34.8㎝、器高10.7㎝を測る。他に回転ヘラ切り底の土師器や青白磁の細片が出土している。全体に土師器は少量である。以上の出土遺物から12世紀中頃から後半の井戸に位置付けられる。

SE033（第26図）　Ａ－１の南東壁面際で検出した井戸で、南半部は調査区外に位置する。北側をSK162に切られる。現況で掘り方は、径約2.7ｍの円形もしくは楕円形プランを呈し、壁面は漏斗状にすぼむ。覆土は淡黄褐色砂質土を主体とし、灰褐色土ブロックが多量に混じる。なお、遺構が調査区際に位置することから安全上、法面掘削を行ったため、断面図に図示した以下の部分は未掘である。

出土遺物（第26図）　170･171は土師器の坏である。170は復元口径13.8㎝を測り、外底部には押し出しに伴う指オサエが残る。外底部の切り離し技法は不明である。171は回転ヘラ切り底で、板状圧痕を有する。172･173は白磁で、172は玉縁状の口縁部を呈する碗Ⅳ類、173は見込みの釉を輪状にカキ取る碗Ⅷ－２類である。172は外面にピンホールが多い。173は外底部に三文字の墨書が記される。174は混入と考えられる越州窯系青磁碗Ⅰ類である。蛇ノ目高台の外底部に目跡を残し、全面施釉後、

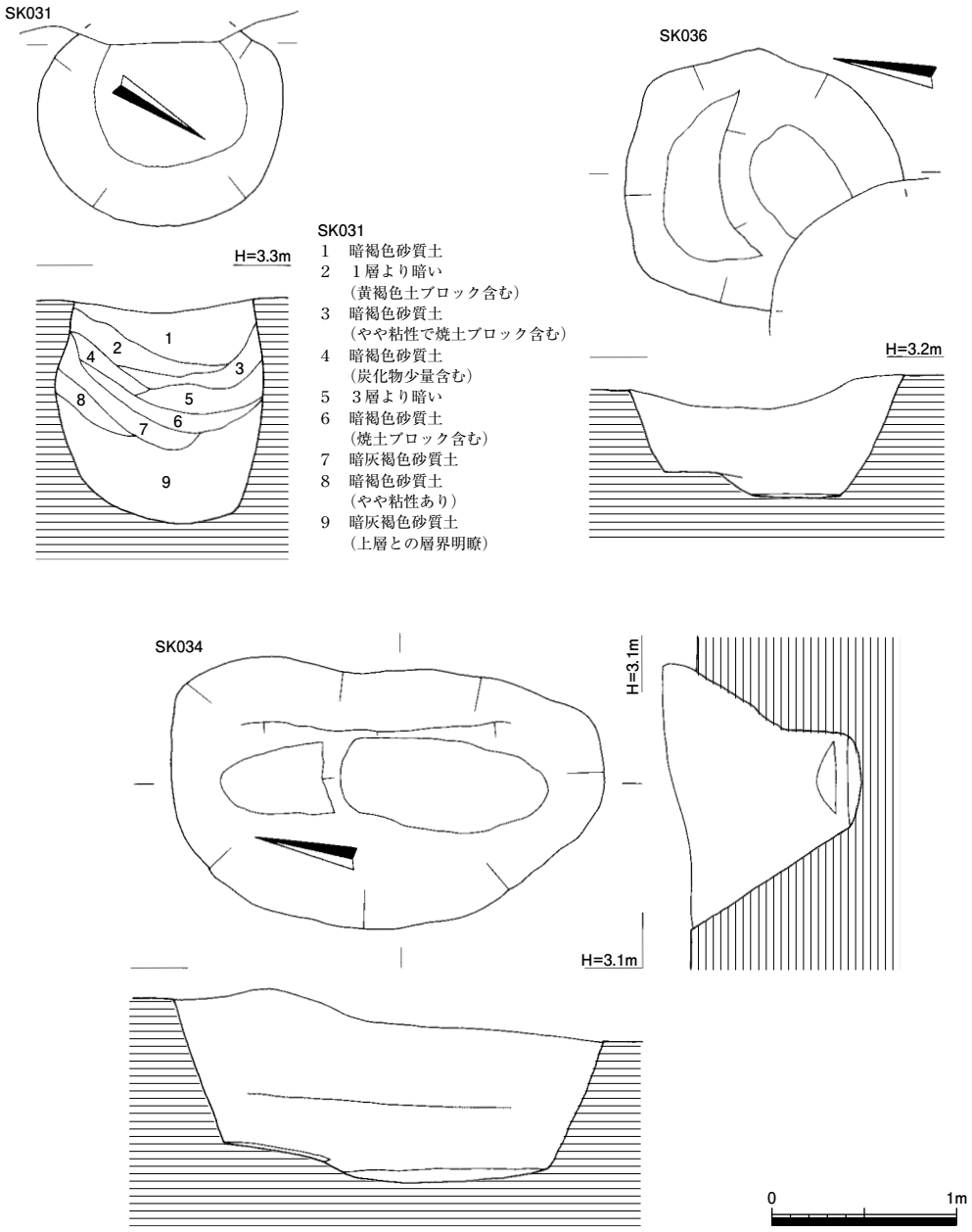


第27図　SE035実測図（１/40）および出土遺物実測図（１/３）

畳付きの釉を削る。淡灰色の緻密な胎土にオリーブ黄色の釉が施される。他に中国陶器や白磁碗Ⅴ類、須恵質瓦等の細片が少量出土している。以上から11世紀末から12世紀前半の遺構と考えられる。

SE035（第27図）　A･B－２に位置する井戸で、SE032を切り、北側の壁面の一部をSK034に切られる。掘り方の平面プランは楕円形を呈し、長径3.0m、短径2.2mを測る。壁面は漏斗状にすぼみ、上面からの深さ約1.7mのほぼ中央部に、径0.8m、深さ約0.2mの円形の掘り込みが認められた。その内部には径約0.65mを測る水溜用の木桶が僅かに残るが、腐朽が進み、桶の詳細は不明である。井戸の下端の標高は1.1mを測り、湿気を帯びるが、湧水は少ない。掘り方内の覆土は茶褐色砂質土を主体とし、暗黄褐色砂が薄く互層をなす。上面から約1.5m下げた付近からやや粘性のある暗灰褐色砂質土の井筒痕跡が検出できた。なお、掘り方の北側にH鋼が既設されており、安全上、その周囲の覆土を残した上で法面掘削を行ったため、北半部の多くは未掘である。

出土遺物（第27図）　175は復元口径8.8㎝を測る土師器小皿で、外底部は板状圧痕を有する回転糸切りである。176･177は中国陶器で、176は大形甕の口縁部片である。口縁部は「Ｙ」字状を呈し、肩部は大きく張り出す。砂粒を多く含む茶褐色の粗い胎土に暗緑褐色の釉が施釉されるが、口縁部は部分的

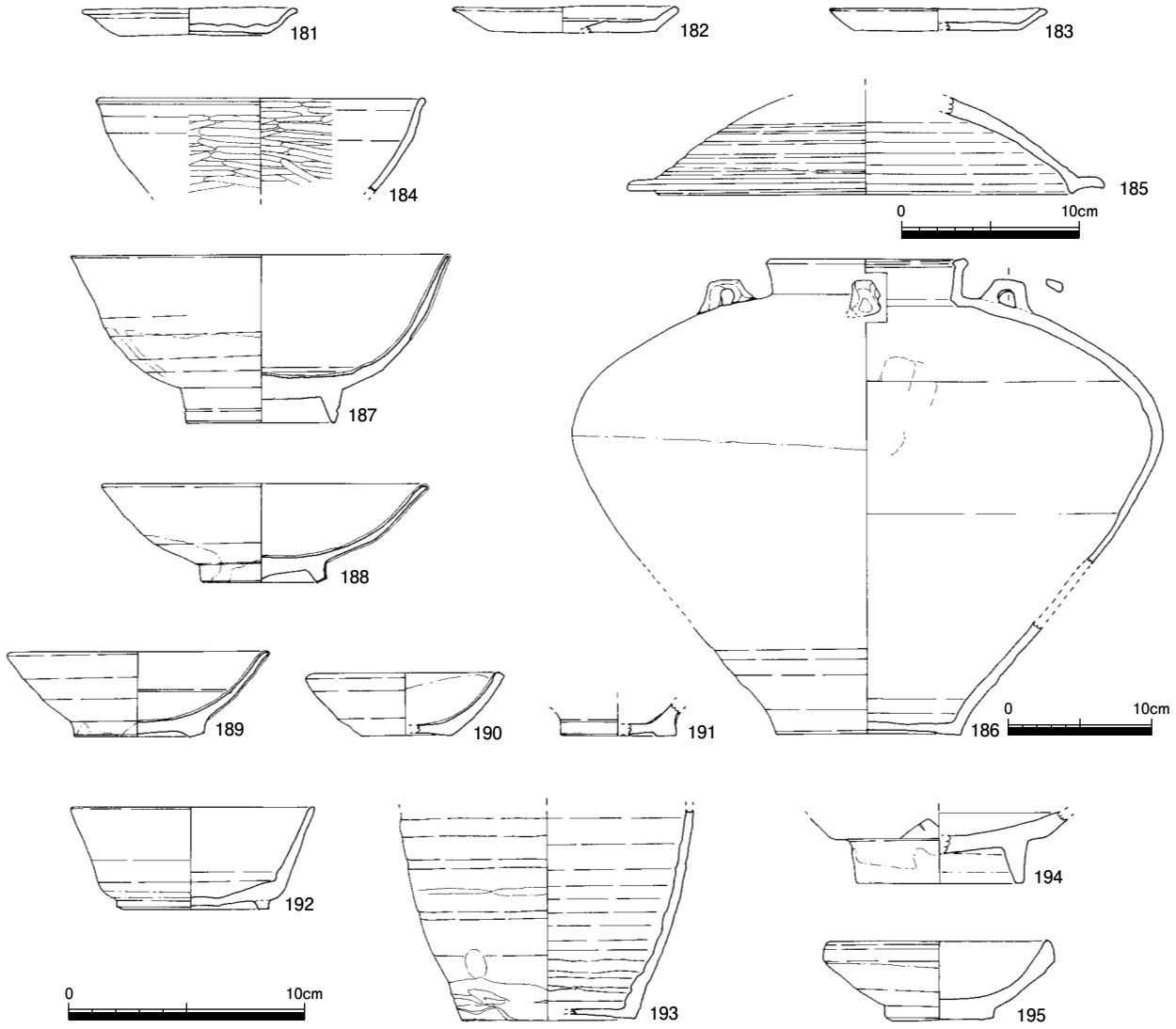


第28図　SK031･034･036実測図（1/40）

に拭き取られる。177は耳壺で、断面三角形の口縁部に短い頸部が続き、横耳を貼付する肩部との境界には突線が巡る。明灰オリーブ色の釉が薄く施され、口縁部内面には目跡を残す。178～180は白磁碗で、この内178･179はⅤ類である。178の内面は貫入が多く、見込みに細い沈線を配する。179は見込みに櫛状工具による施文を有し、外底部に不鮮明ながら墨書が記される。180は角高台の皿で、見込みには段が認められる。外面下半以下は露胎である。他に瓦器や白磁碗Ⅳ類等の細片が少量出土している。以上から12世紀中頃から後半の井戸に位置付けられよう。

（2）土坑（SK）

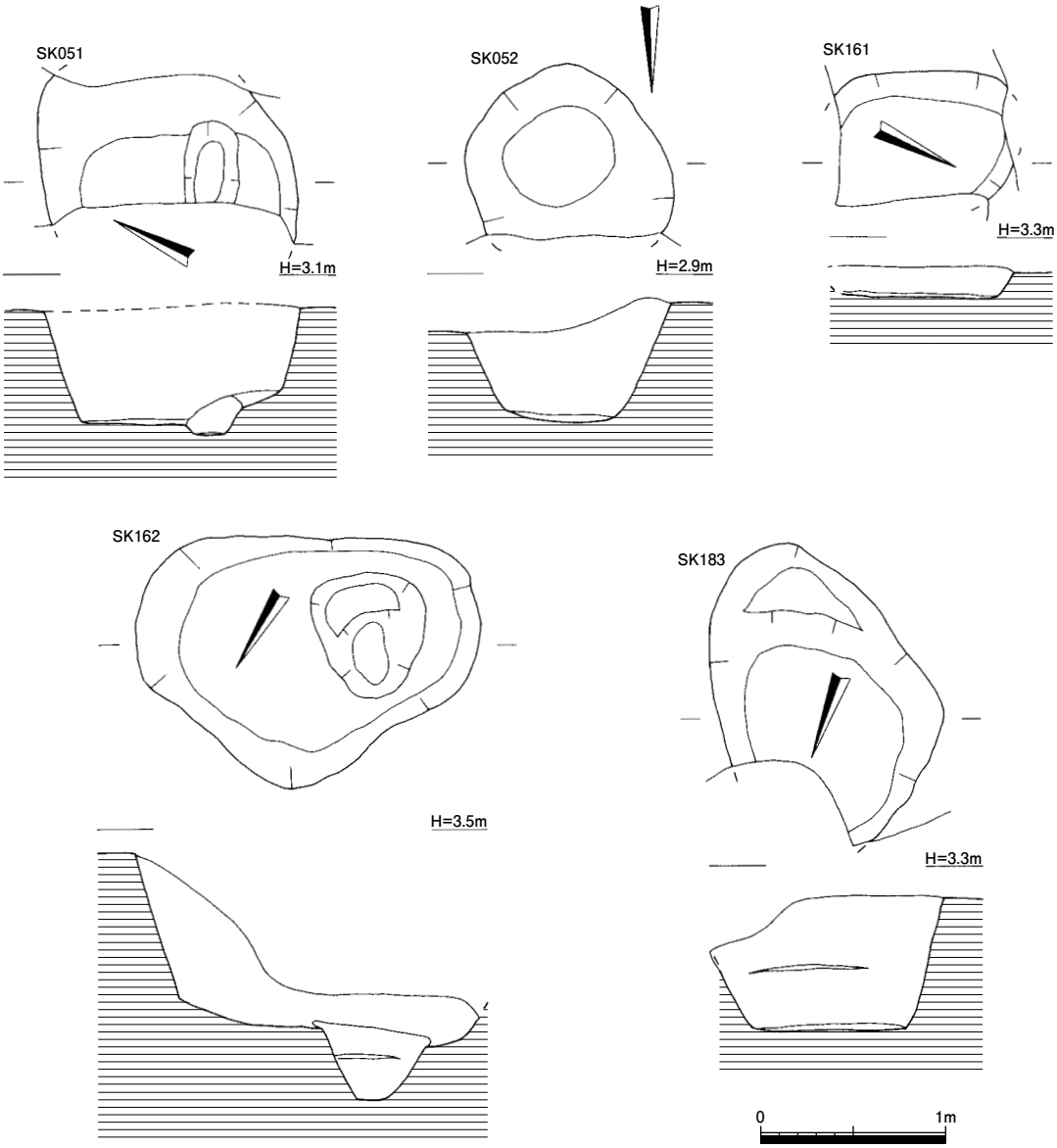
SK031（第28図）　調査区南西壁面際のA－2で検出した径1.3m、深さ1.2mを測る円形プランの土



第29図　SK031･034･036出土遺物実測図(185は１/４、186は１/５、他は１/３)

坑で、西側の一部が調査区外に続く。壁面はややハング気味に立ち上がり、底面は凹面をなす。覆土は暗褐色系の１～９層と暗灰褐色の10層とは層界が明瞭である。

出土遺物(第29図181～191)　181～183は土師器小皿で、順に復元口径は9.1、9.5、9.2㎝を測る。いずれも外底部には板状圧痕を有し､181･182は回転ヘラ切り､183は回転糸切りである。184は瓦器椀で、口縁部を僅かに外反させる。器面はヘラ研磨により平滑に仕上げる。185･186は中国陶器で、185はかえりを有する蓋である。胎土には砂粒を含み、外面の天井部に灰オリーブ色の釉が施される。露胎部分は黄橙色を呈する。186は耳壺で、「Ｔ」字状の口縁部に短く直立する頸部が付き、肩から胴部が大きく張る。頸部に近い肩には縦耳を貼付する。胴部上半に胴部最大径を有し、そこから底部に向かって直線的にすぼむ。胎土は灰色で、口縁部外面から胴部上半まで緑灰色の釉が薄くかけられる。露胎部分は淡茶褐色を呈する。187～190は白磁である。187は碗Ⅴ－１ａ類で､見込みに段状の沈線が巡る。体部下半以下を露胎とする。188は器高の低い碗Ⅵ－１ａ類で、濁った白色の釉が内面から外面の下半まで施される。189は低い高台が付く皿Ⅱ－１ａ類で、体部内面中位に段を有する。高台際まで釉

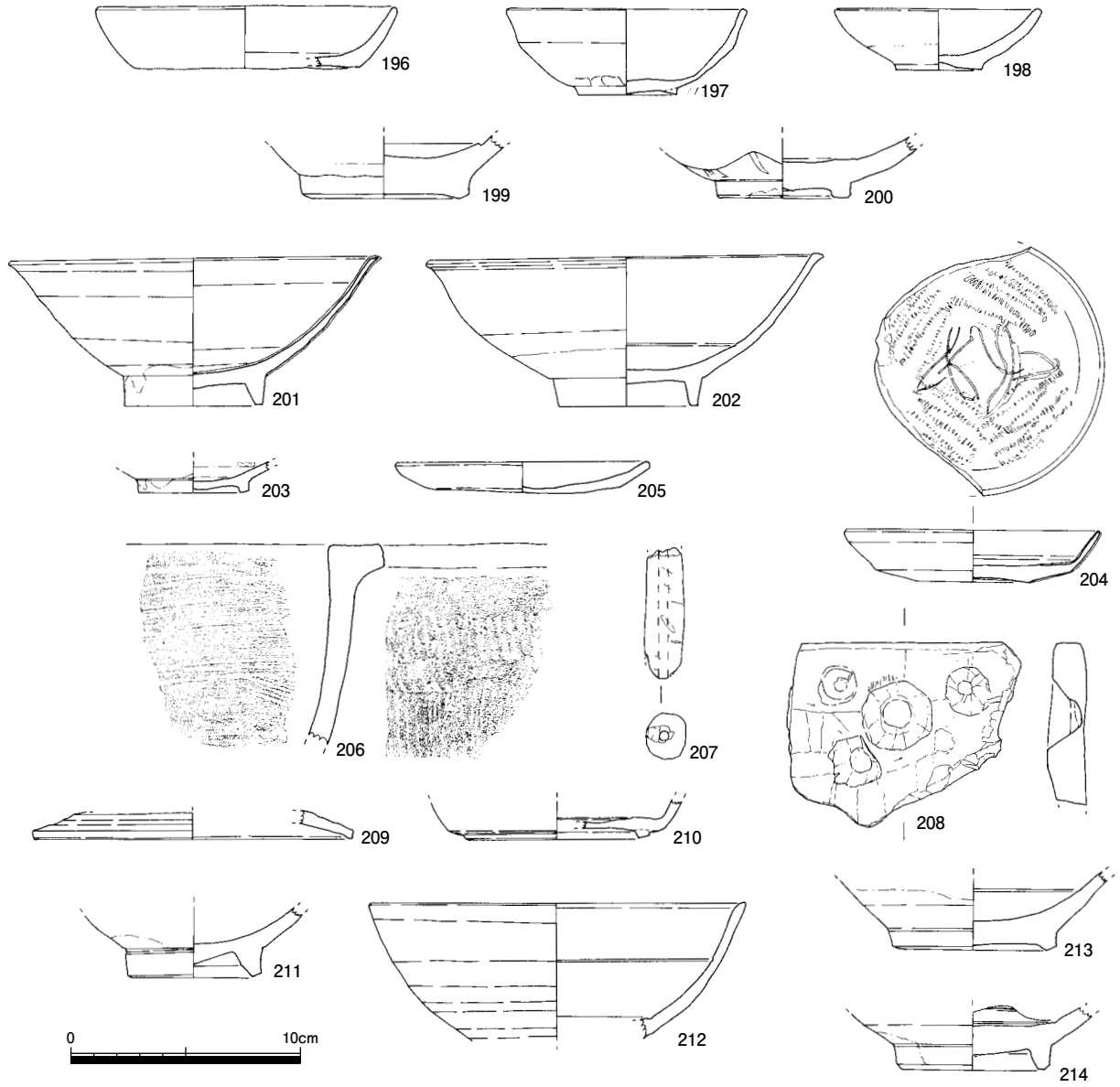


第30図　SK051･052･161･162･183実測図（１/40）

が垂れる。190は小形の皿で、やや青味のある釉が体部内面のみに施釉され、貫入が多い。口縁部から外面は露胎で、淡灰色を呈する。191は混入と考えられる越州窯系青磁碗Ⅰ類で、蛇ノ目高台の畳付きの釉は削り、露胎となる。龍泉窯系や同安窯系青磁は出土していない。以上の出土遺物から12世紀前半の遺構と考えられる。

SK034（第28図）　Ａ－２に位置し、SE035を切る土坑である。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.3m、幅1.4m、深さ1.0mを測る。断面は逆台形で、北側にテラスを有する。また、東側壁面の中位には段があり、底面に向かって急に落ちる。覆土は全体に均一で、粘性のある暗灰褐色砂質土に黄褐色砂が混じる。

出土遺物（第29図192～194）　192は混入品の須恵器坏身で、断面方形の低い高台を貼付する。体部は直線的に立ち上がる。外底部は回転ヘラ切りし、ナデを加える。193は中国陶器の壺で、底部の器壁は薄い。内面には轆轤成形時の凹凸が顕著である。内外面に釉は認められず、器面は灰茶褐色を呈する。194は白磁碗Ⅴ類の底部である。規模に比して出土遺物は少なく、他に回転ヘラ切りおよび糸



第31図　SK051･052･161･162･182･183･198出土遺物実測図（１／３）

切りの土師器や同安窯系青磁の細片が少量出土している。12世紀中頃から後半の遺構であろう。

SK036（第28図）　Ｂ－１･２で検出した土坑で、南西側を撹乱されるが、平面プランは不整方形を呈するものと考えられる。第２面で不明瞭に確認したが､実際の掘削は第３面で行った。長さ約1.5m、幅1.4m、深さ0.65mを測り、北側には平坦面がある。覆土はやや粘性のある茶褐色砂質土である。

出土遺物（第29図195）　玉縁状の口縁部を有する白磁Ⅲ－１ｂ類である。外面は上半部のみに施釉される。他に回転ヘラ切りおよび糸切りの土師器や、中国陶器、同安窯系青磁の細片が少量出土している。12世紀中頃の遺構に位置付けられる。

SK051（第30図）　Ｂ－２の調査区南端で確認したが、西側は調査区外に位置し、東側の壁面は撹乱されるため全容は不明であるが、南北長1.4m、深さ0.6mを測る。底面には溝状の掘り込みを有する。壁面は比較的急に立ち上がり、覆土はやや茶味のある褐色砂質土で黄褐色砂が混じる。

出土遺物（第31図196～200）　196は復元口径13.0㎝を測る回転糸切り底の土師器坏で、板状圧痕を

有する。197は土師器の小碗で、断面三角形の低い高台を貼付する。体部の中位で鈍く屈曲する。口縁端部の数箇所が黒色に変色しており、灯明皿として利用されていたものと推定できる。198は陶器皿で、僅かに底部を削り出す。外底部は回転糸切り痕を残し、上げ底となる。内面および外面上半に暗灰オリーブ色の釉が施され、露胎部分は灰赤色を呈する。199は白磁碗Ⅳ－１ａ類で、見込みに段を有する。200は外面に片彫りの蓮弁文を施す龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、畳付きまで釉が垂れる。他に須恵質土器、白磁碗Ⅴ類、同安窯系青磁等が出土した。13世紀前半の土坑であろう。

SK052（第30図） Ｂ－２に位置し､北側を撹乱される。現況で不整な円形を呈するものと推定され、径1.1ｍ、深さ0.65ｍを測る。断面は逆台形をなし、底面はほぼ平坦である。覆土はやや粘性のある黒褐色砂質土で、炭化物を少量含む。

出土遺物（第31図201～204） 201･202は白磁碗Ⅴ－４ａ類である。口縁部は外方に先尖りになり、上面を平坦にする。見込みには沈線が巡り、体部下半以下には施釉しない。203は白磁皿Ⅲ－１類で、見込みの釉を輪状にカキ取る。低い角高台が付く。204は同安窯系青磁皿Ⅰ－２ｂ類で、見込みにヘラおよび櫛状工具による施文を有する。全面施釉後、外底部の釉を粗く削る。201と204は底面直上で出土した。他に回転糸切り底の土師器や中国陶器の細片が出土している。以上の出土遺物から12世紀後半に位置付けられる土坑である。

SK161（第30図） 調査区北側のＡ－１で検出した。東側を上面遺構に切られ、北西側が調査区外に続くため詳細は不明であるが、現況から長径１ｍを超える楕円形プランの土坑と推定される。深さは0.15ｍを測り、底面は平坦である。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第31図205） 完形の土師器小皿で、口径11.0㎝を測る。外底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕を有する。他に土師器や須恵器の細片が出土している。

SK162（第30図） Ａ－１で確認したSE033に後出する土坑で、SK161の南側に隣接する。平面プランは不整な楕円形を呈し、長径1.9ｍ、短径1.4ｍを測る。深さ約0.9ｍで底面となるが、東側に深さ0.4ｍのピット状の掘り込みを有する。覆土はやや粘性のある暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（第31図206･207） 206は逆「Ｌ」字状の口縁部を呈する土師質土器の鍋である。口唇部は鈍い面をなし、その上端に浅い刻目を施す。体部の内外面に刷毛目調整を施すが、内面上半にはヘラナデを加える。207は端部を欠損する管状土錘で、やや扁平な断面形を呈する。径1.7～2.0㎝を測る。他に回転糸切り底の土師器、中国陶器、白磁碗Ⅳ･Ⅴ類等の細片が出土している。12世紀後半代の遺構であろう。

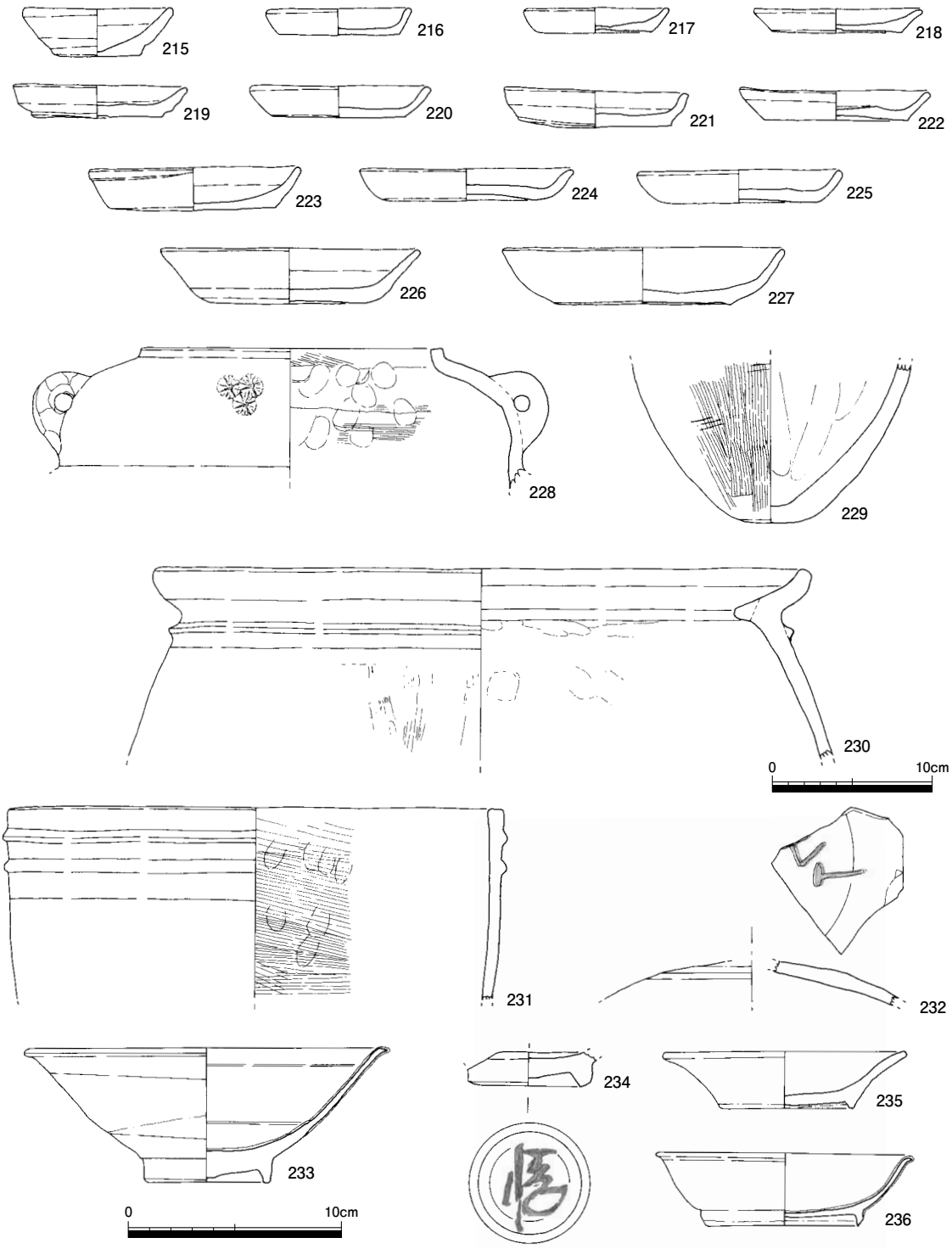
SK182（第21図） 調査区西端のＡ－２に位置するが、遺構の大半は調査区外に続き、隅丸のコーナー部分を検出したにとどまる。覆土は淡黒褐色砂質土を主体とし、深さは約0.3ｍを測る。

出土遺物（第31図208） 滑石製石鍋の口縁部を再利用したもので、外面の４箇所に断面逆台形状の孔を鑿で掘り込み、研磨を加える。他に回転糸切り底の土師器や白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁等の細片が出土している。

SK183（第30図） 上述のSK182に切られる土坑で、不整な楕円形を呈する。短径1.2ｍ、深さ0.75ｍを測り、南側の壁面中位に平坦面を設ける。断面は逆台形をなし、暗灰褐色砂質土を覆土とする。

出土遺物（第31図209･210） いずれも小片の須恵器を復元図化したものである。209は坏蓋で、端部を短く折り曲げ、外面は平坦面をなす。内外面をヨコナデ調整する。210は坏身で、断面方形の極低い高台を貼付する。外底部は回転ヘラ切り痕が残り、他はヨコナデを加える。他に古代と推定される土師器の細片が数点出土した。８世紀後半代の土坑に位置付けられよう。

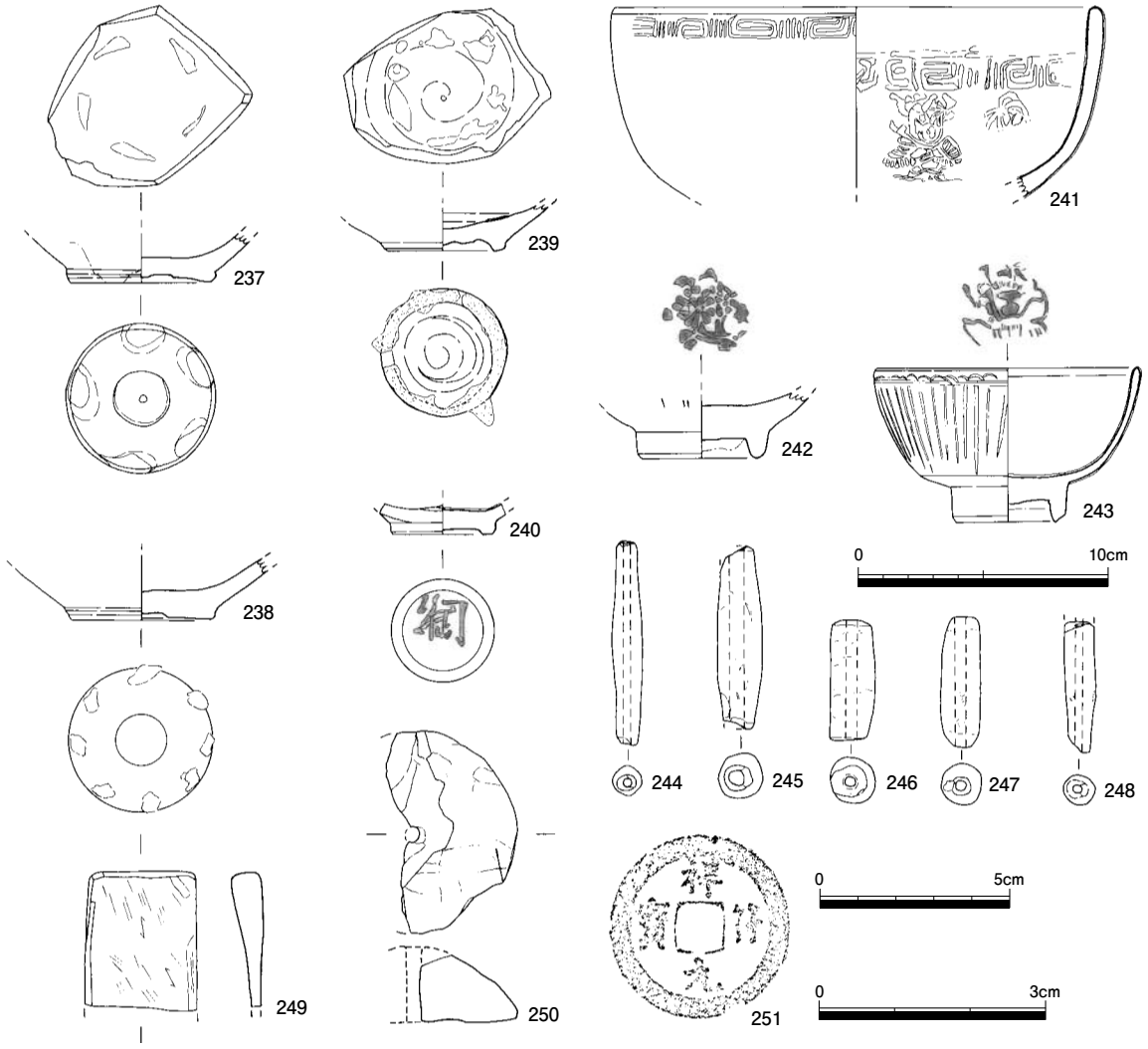
SK198（第21図） Ｂ－２の調査区南西壁面際で検出した遺構であるが、北西側の一部を確認したに



第32図　第１面包含層出土遺物実測図（１）（230･231は１／４、他は１／３）

とどまる。覆土は暗灰褐色砂質土で、深さ0.7ｍを測る。

出土遺物（第31図211～214）　211は器形から同安窯系青磁碗と思われるが、釉調は青味のある白色を呈する。外底部には施釉されない。212～214は白磁で、212は碗Ⅴ－１ａ類である。見込みに深めの段が認められる。213は碗Ⅳ－１ａ類で、外面から破面に煤の付着が認められる。214は見込みに段



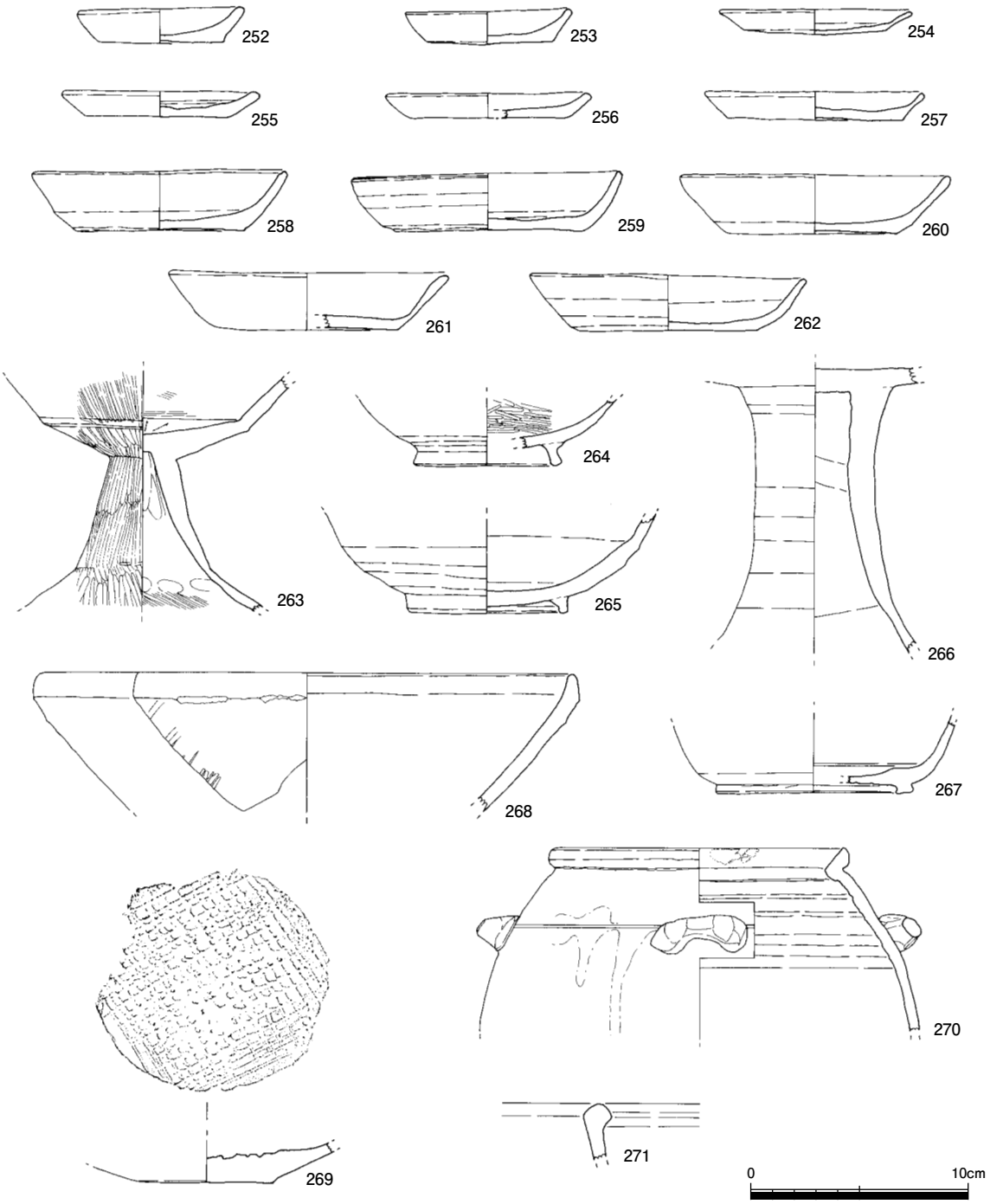
第33図　第１面包含層出土遺物実測図（２）（244～249は１／２、251は１／１、他は１／３）

状の沈線が巡る碗である。外面の下半は露胎であるが、一部が高台まで垂れる。他に丸底の土師器坏や中国陶器が出土しているが、青磁はない。以上から11世紀後半から12世紀初頭の遺構であろう。

４）包含層等出土の遺物

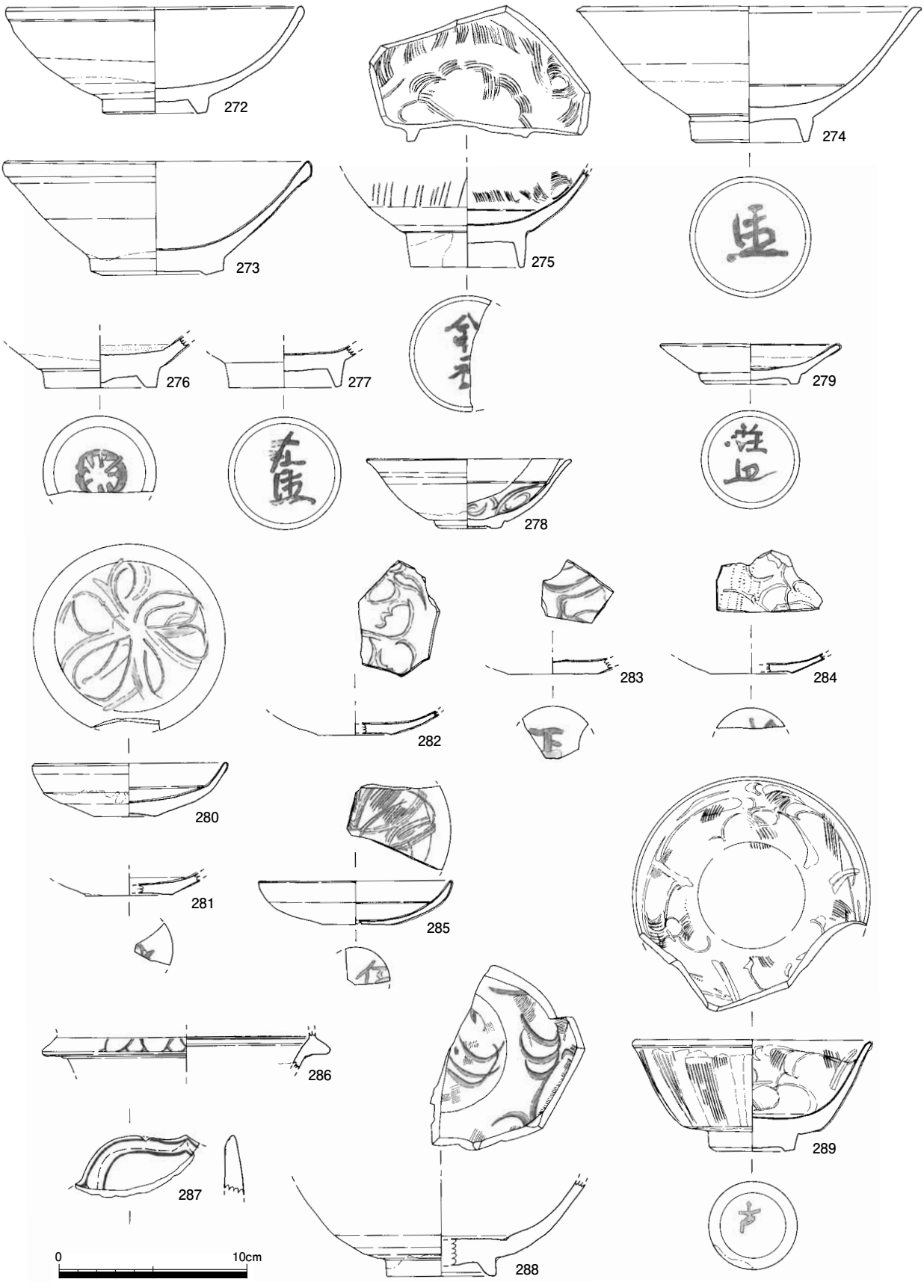
最後に、各調査面の間層に堆積する包含層および最終の第３面遺構検出時の出土遺物について主たるものを報告する。その呼称については、「Ⅲ.－１.－２）調査の概要と層序」のとおりである。

第１面包含層出土遺物（第32･33図）　215～227は回転糸切り底の土師器で、いずれも板状圧痕はない。215～225は小皿、226･227は坏である。215は器高が高く、内底部がすぼむ形態である。また、215～217、226は口縁端部に芯跡と考えられる炭化物が吸着し、灯明皿に使われたものと推定される。228は土師質の湯釜で、大きく肩の張る胴部に短い直立する頸部を有する。頸部下の肩には菊花文がスタンプされ、その下位に縦耳が貼付される。その下には鍔が巡るが基部を残して欠失している。229･230は弥生土器の甕で、前者は後期後半、後者は中期末の土器である。229の底部は小さな凸レンズ状を呈し、外面は刷毛目調整を行うが、下地に叩き痕が残る。230は内湾して「く」字状に折れる口縁部を有し、断面三角形の突帯が付く。231は瓦質土器の火舎である。円筒形の体部には断面蒲鉾状

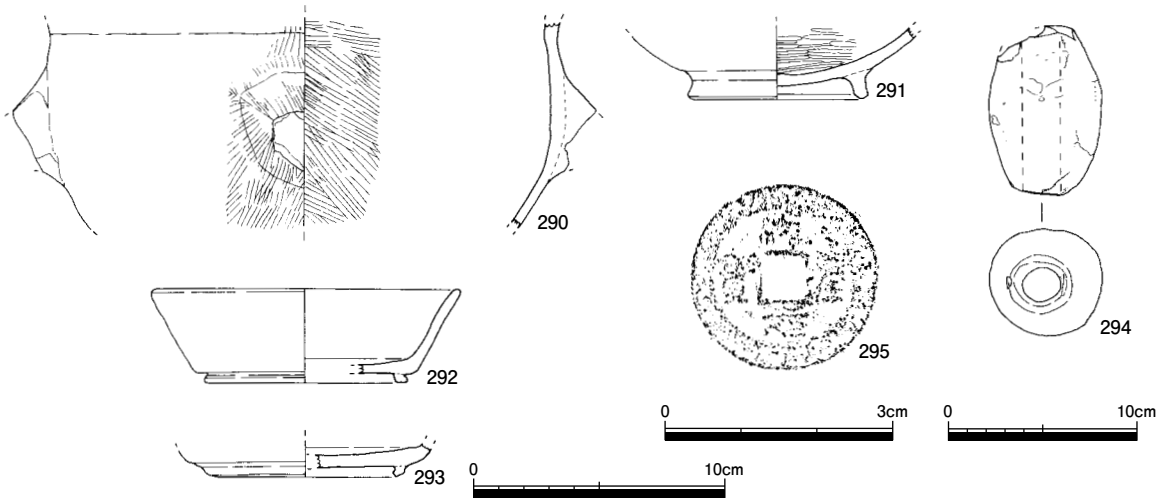


第34図　第２面包含層出土遺物実測図（１）（１／３）

の突帯を２条貼付し、その間に菊文のスタンプを施す。内面には粗い刷毛目調整を行う。232は須恵器の坏蓋で、回転ヘラ削りを行う天井部外面には墨書が認められる。233～236は白磁である。233は碗Ⅴ－４ａ類、234は碗の外底部に墨書が記される。235･236は皿で、235は体部が反り、碁笥底風の低い高台を有する。236は端反りで、高台端部が尖る。共に全面に施釉されるが、畳付きのみ露胎とする。237･238は蛇ノ目高台に目跡を残す越州窯系青磁碗で、前者は見込みにも目跡があり、外面の下半は露胎、後者は全面施釉されるが、畳付きの釉を削る。239は朝鮮王朝の灰青陶器碗で、畳付き



第35図　第２面包含層出土遺物実測図（２）（１/３）



第36図　第３面遺構検出時出土遺物実測図(290･294は１／４、295は１／１、他は１／３)

および見込みに目跡が残る。畳付きを除き、明オリーブ灰色の釉が施される。240～243は龍泉窯系青磁である。240は小碗で、外底部に墨書で「綱」を記す。241～243は明代の碗である。241の体部は丸く立ち上がり、口縁部では直立して端部を丸く納める。口縁部の内外には印花による雷文を配し、内面にも人物文がスタンプによって施される。242･243は見込みに印花を有するもので、高台内の途中まで施釉がおよぶが、外底部は露胎である。243は小碗で、外面にヘラ描の細蓮弁文を有し、弁先は丸味を帯びる。高台の外面にシャープな面取を施す。244～248は管状土錘である。244･246･247は完形品で、順に重量は2.85、5.03、4.35ｇを測る。249は粘板岩製の砥石で、折損部を除いて砥面として使用する。250は断面台形状を呈する滑石製石錘で、中央部に径0.6㎝の穿孔を有する。251は北宋代の銅銭「祥符元寶」(初鋳年：1009年)である。

第２面包含層出土遺物(第34･35図)　252～262は回転糸切り底の土師器で、253～255、258には板状圧痕が認められる。252～257は小皿、他は坏である。263は土師器の高坏で、屈曲する坏部に裾が開く脚部が付く。外面は縦方向に丁寧なヘラ研磨を施す。264は黒色土器Ａ類の椀で、内面はヘラ研磨により仕上げる。265は断面方形の低い高台を貼付する瓦器椀である。器面がやや荒れるが、体部の調整は粗いヘラ研磨と思われる。266･267は須恵器である。266は高坏の脚部で、ヨコナデを施す。267は低い高台を外底端部に有する坏身である。外底部には回転ヘラ切りを残す。268は東播系須恵質土器の鉢である。口縁部は「く」字状に屈曲し、その外面には自然釉が認められる。269は瀬戸焼の卸皿である。内底部の卸目は、ヘラ状工具で刻目を入れた後、直交する沈線を描いて格子目状とする。外面は露胎、内面には灰釉が施される。外底部には回転糸切り痕を残す。270･271は中国陶器である。270は耳壺で、目跡を残す「く」字状の短い口縁部から体部が続き、肩に横耳を貼り付ける。内外面にオリーブ灰色の釉が掛けられ、更に外面の肩付近には茶褐色の釉を流し掛けする。271は断面方形の口縁部を有する盤の口縁部片で、淡黄橙色の粗い胎土に緑釉を施す。272～278は白磁の碗である。272は小振りな玉縁口縁のⅡ－１類で、体部外面の下半以下には施釉されない。273はⅣ－１ａ類で、見込みに沈線や段はない。274は外底部に墨書を記すⅤ－４ａ類で、釉調は黄味が強い。見込みには浅い沈線を有する。275はⅤ－４ｃ類で、外面にはヘラ、内面には櫛による施文を施し、外底部に２文字の墨書が認められる。276は外底部に車輪状の記号が墨書で記されるもので、見込みの釉を全てカキ取り、周囲に砂目が付着する。277はⅤ類と思われる底部で、外底部に２文字の墨書を有す

る。278は小碗で、幅広の低い高台から体部が開き、口縁部は外反する。内面にはヘラ状工具による文様が施される。オリーブ黄色の釉が内面および外面上半に掛けられる。279～285は白磁Ⅲである。279は見込みの釉を輪状に削り取るⅢ－１類で､外底部に２文字の墨書が記される。280･281はⅥ類で、体部下半には施釉されない。280は見込みにヘラ描きの花文を施すⅥ－２ａ類、281は無文のⅥ－１類で外底部に墨書を有する。282～285は外底部の釉を削り、ヘラ描きの施文を有するⅧ－１類で、外底部に墨書が認められる。284･285は櫛状工具によっても文様を加える。286･287は器種不明の白磁で、286は鍔に片彫りによる花弁を施す。287は端部が薄くなる板状のもので、縁に二重の沈線を有する。水注や香炉等の装飾であろう。288は同安窯系青磁碗で、体部内面および見込みに片彫りと櫛状工具による文様を施す、見込みに段を有する。高台の一部に釉が垂れるが、外面下位は露胎となる。289は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－６ａ類で、外面に櫛目と片彫りの蓮弁文を施し、内面にも同様の工具による施文を有する。半透明の緑茶色の釉が掛けられるが、体部外面下半の屈曲部以下は露胎である。外底部には不鮮明ながら墨書が記される。

第３面遺構検出時出土遺物（第36図）　290は土師器の甑で、内外面に刷毛目調整を行う。291は黒色土器Ａ類の椀で､内面をヘラ研磨による平滑に仕上げる。292･293は須恵器の坏身である。低い高台は、292では外側に端部を広げ、293はやや内側に丸味を帯びる。294は紡錘形を呈する大形の管状土錘で、径5.7～6.0㎝、口径2.0㎝を測る。端部の一部を欠損する。295は不鮮明であるが、北宋代の銅銭｢紹聖元寶｣（初鋳年:1094年）と考えられる。

３．結語

検出した遺構の時期については本文中でそれぞれ述べたが、最後に本調査区での遺構時期の変遷を周辺調査区の成果を含めてまとめておきたい。遺構の主な時期は、８世紀（Ⅰ期）、12世紀前半から13世紀中頃（Ⅱ期）、16世紀（Ⅲ期）の大きく３時期に大別できる。

Ⅰ期の遺構として認識できたものは８世紀後半の第３面SK183のみであるが、上面の遺構や包含層中には８世紀代の須恵器が散見する。また、やや時期が下る可能性があるものの、越州窯系青磁も見られ、｢Ⅱ．遺跡の立地と環境｣で触れたように近隣調査区では、古代の区画溝の検出や古代瓦の出土例もあり、官衙推定域の北西側にも該期の遺構の拡がりが確認できる。なお、包含層出土であるが、弥生時代中期末の甕(230)が最も時期が遡る遺物であり、186次調査SK174出土遺物の時期とも符合することから、該期には砂丘Ⅰから集落範囲が拡がったことが窺える。

Ⅱ期には第２･３面の遺構の大半が帰属し、井戸や土坑が急増する。これはこれまで指摘されてきた博多浜の都市化を示すものであるが、13世紀後半代に位置付けられる遺構は認められなかった。これは、包含層出土遺物も含めて該期の標識磁器である龍泉窯系青磁Ⅲ類や白磁Ⅸ類の出土がないことからも裏付けられ、隣接する第162次調査でも同様である。｢Ⅱ．遺跡の立地と環境｣に述べたように鎮西探題の設置と関わるかは、周辺調査を待って検討を加えていきたい。また、後述のⅢ期に至るまでに堆積した第４図５層は、｢Ⅲ.－１.－２）調査の概要と層序｣で記述したように整地に起因する層位ではなく、自然堆積層であった。このことからⅡ期以降、Ⅲ期に至るまで該地は積極的に土地利用がなされない状態が続いたものと思われる。

Ⅲ期には第１面遺構が属する。16世紀後半に位置付けられる主軸方位Ｎ－54°－ＥのSD003は、方位や時期から太閤町割りに伴う区画溝の可能性が高く、壁面の鉄分沈着は長期の使用によるものであろう。なお、同様の溝は、本調査区南東約200ｍの第172次調査でも柵列を伴って確認されている。

図　　版

作業風景

（１）第１面北西側全景（南西から）

（２）第２面北西側全景（南西から）

（３）第２面南東側全景（南西から）

図版２

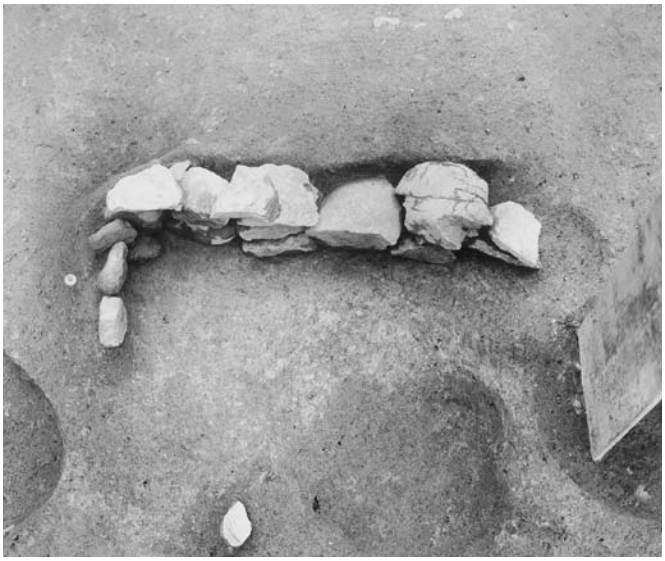
（１）第３面北西側全景（南西から）

（２）第３面南東側全景（南西から）

（１）SK001（南東から）

（２）SK002（南西から）

（３）SK002土層（南西から）



（４）SK004（北東から）

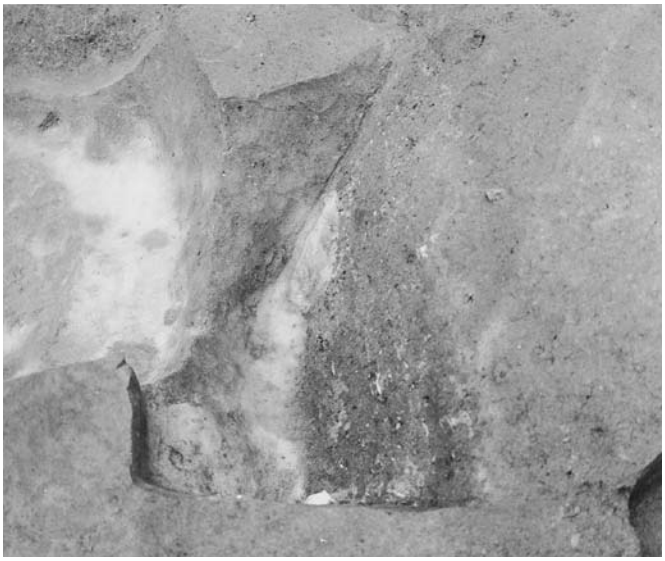
（５）SD003（南西から）

（６）SD003土層（北東から）

図版４

（１）SD006（北東から）

（２）SD006土層（東から）



（３）SK011（南東から）

（４）SK012（南東から）

（５）SK014（西から）

（６）SK015（南東から）

（１）SK016(北東から)

（２）SK017(北東から)

（３）SK018(北東から)

（４）SK127(南東から)

（５）SE032(南西から)

（６）SE033(北東から)

図版 6

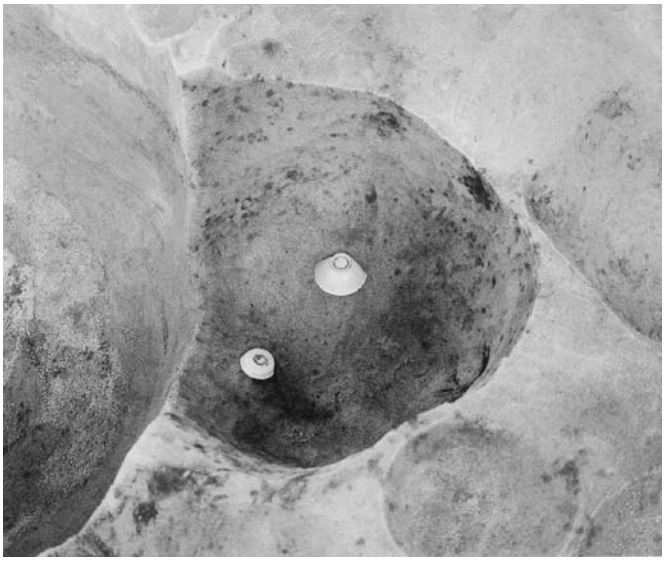
（１）SE035（東から）

（２）SK031（北東から）

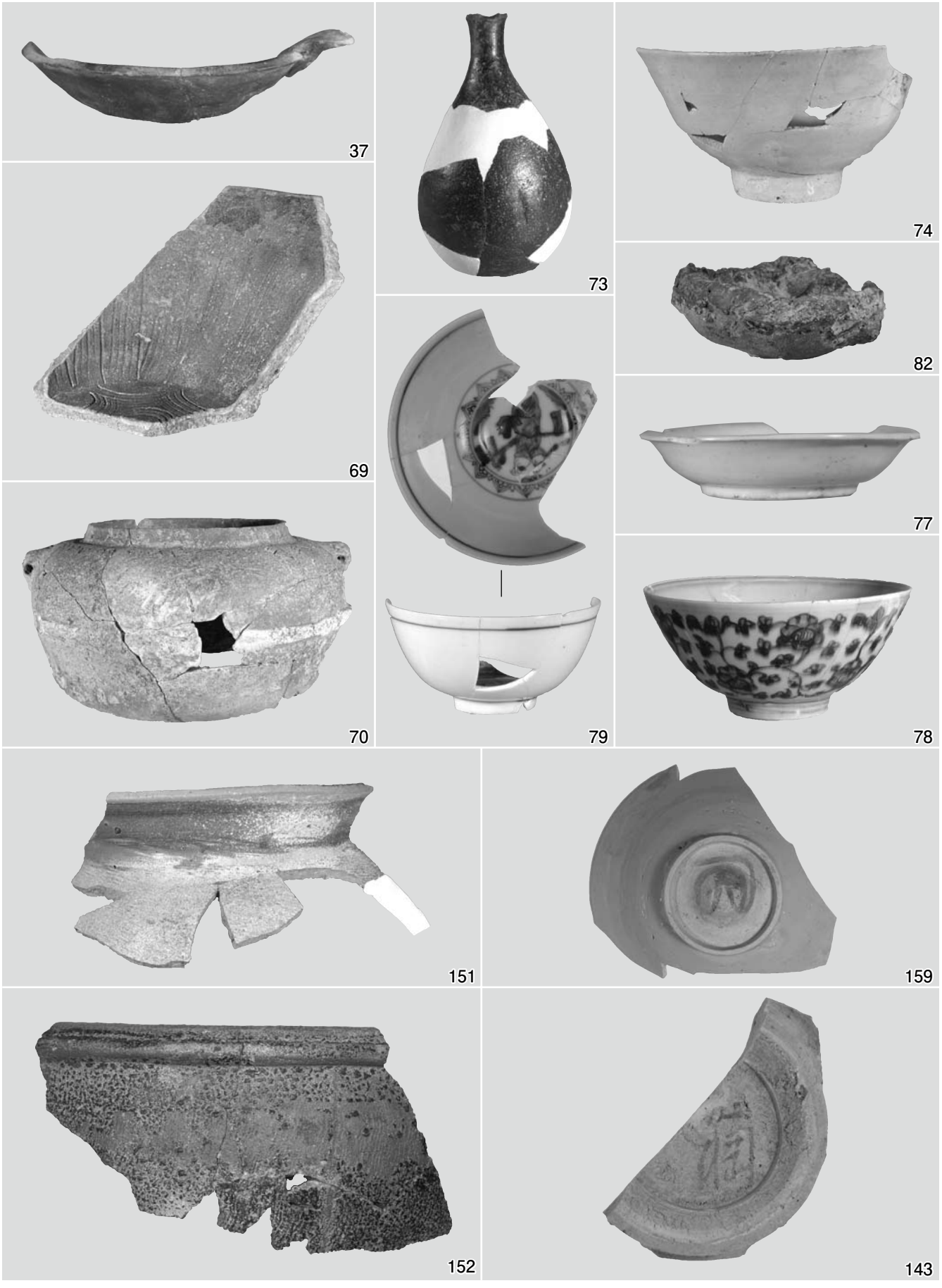
（３）SK034（北から）

（４）SK036（南西から）

（５）SK051（北から）

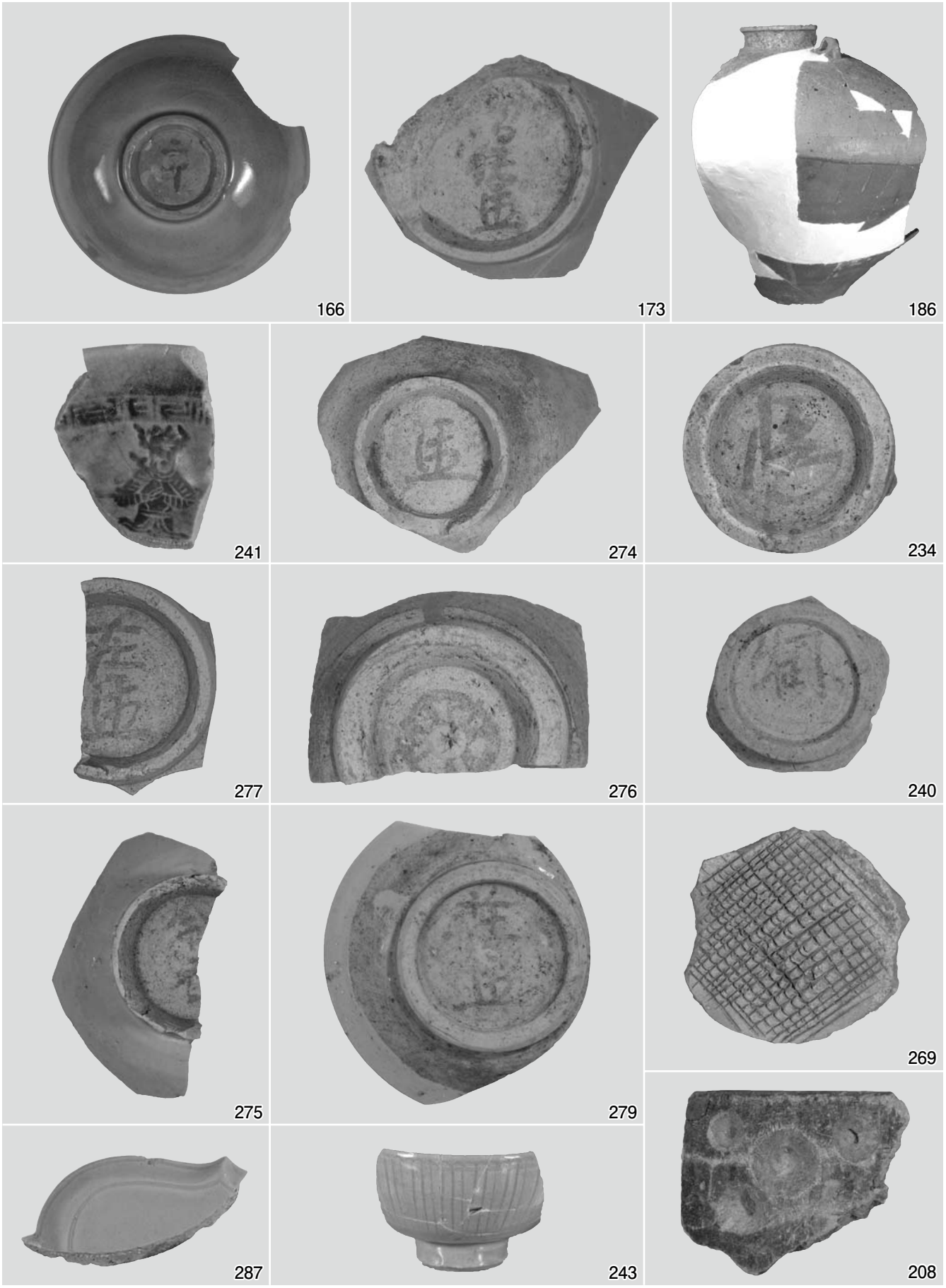


（６）SK052（西から）



出土遺物（1）

図版 8



出土遺物（２）

報　告　書　抄　録

ふりがな	はかた144　－はかたいせきぐんだい191じちょうさほうこく－
書名	博多144
副書名	―博多遺跡群第191次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1197集
編著者名	榎本 義嗣
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092－711－4667
発行年月日	2013年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくれいせんまち 博多区冷泉町	40132	020121	33° 35′ 42″	130° 24′ 40″	20100902 ～ 20101122	162.3	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落 （都市）	平安時代 鎌倉時代 戦国時代	井戸、土坑、溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、国産陶器、中国産陶磁器、朝鮮産陶器、土製品、石製品、金属製品	中世前半期と後半期の集落（都市）を確認

要約	博多湾岸の古砂丘上で実施した中世都市遺跡の調査で、遺構の主体は12～13世紀代と、断絶期を挟み、16世紀代とに大別できる。前者に都市化が窺われるが、その後は生活の場としての土地利用がなされない期間が続く。16世紀代の遺構の内、現在の街区方向に類似する溝は、いわゆる「太閤町割り」の地割りに伴うものと推定される。

博多（はかた） 144

―博多遺跡群第191次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1197集

2013（平成25）年３月22日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
（092）711－4667

印刷　株式会社博多印刷
福岡市博多区須崎町８－５
（092）281－0041